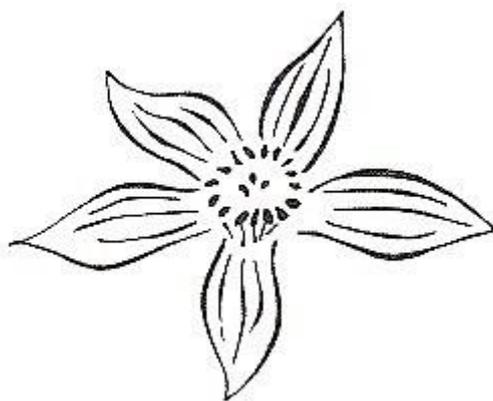


「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」

令和5年度研究開発実施報告書



愛媛県立三崎高等学校

巻頭言

愛媛県立三崎高等学校

校長 中井 賢哉

本校は、令和4年度より文部科学省から「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」に採択され、中教審答申において提言された「普通教育を主とする学科」の弾力化を実現するため、「地域社会に関する学科」の設置に向けて実践研究を行ってまいりました。これまでの地域探究活動の取組と実践研究の成果を踏まえ、令和6年度入学生から普通科を改編し、「社会共創科」を設置することとなりました。

「社会共創科」では、地域の人々と共感しながら、共に社会の創り手となるリーダーを育成することとし、次の3つの特色ある教育活動を展開します。

① 探究活動を軸にした2年生からのコース選択

現在のコース編成は、就職、専門学校進学を主としたI型、四年制大学進学を主としたII型という、進路希望に応じたコースとなっています。新学科では、興味・関心のある探究活動分野を軸にした3コース（地域探究、人文探究、理数探究）から選択することとなり、生徒の学びに向かう力を高めます。また、どのコースからも就職・進学が可能です。

② 進路希望に応じた放課後活動

授業時数を、現在の週33時間から29時間に減らし、公営塾や地域との連携強化を図ることにより、生徒が主体的に放課後の自主学習や探究活動などに取り組むことができる環境を整備することに加え、地域の方々を講師とした未咲輝ゼミ（放課後ゼミ）を開催します。

③ オンラインの学校設定科目

地域とつながる授業として、伝承や文学者を教材化する「地域文化と国語」、地域価値の再確認を図る「トライブ・ラーニング」、SNS等を活用した表現活動を行う「せんたんコミュニケーション学」など、三崎高校にしかない、三崎高校でしかできない学校設定科目を新設します。

また、令和5年度の特徴的な取組としては、新学科のキックオフイベントとして開催した「今を創る、未来を変えるトライブ」が挙げられます。この企画（フォーラム）は、県内外7校28名の高校生たちが伊方町に集まり、地域ガイドやメンターの方々と伊方町の6集落でフィールドワークを行い、各集落の広報用動画を作成しました。参加した高校生は「過疎化は問題だと思っていたが、過疎化は地域価値の再発見に繋がるものだと認識が変わった」などと述べており、将来、それぞれの地域のリーダーに成長すると期待されます。このようなインパクトのある企画のほか「Jobフェア in みさこう」「みさこうSTEAM教育」など数々の活動を実施しました。

このように、新学科「社会共創科」では、地域探究を軸とした地域連携を教育課程に位置付けるとともに、生徒の進路希望に応じた、個別最適な学習環境を整備することで、これまで以上に生徒の学びの自走性を高め、地域の人々と共感しながら、共に社会の創り手となるリーダーの育成を図りたいと考えております。

最後になりましたが、本事業に関して御支援、御指導を賜りました関係者の皆様方に感謝申し上げます。巻頭の挨拶といたします。

目 次

○	巻頭言	
○	目次	
I	概要	1
1	事業の概要	2
2	事業の目的等	4
3	実施体制	6
4	学際領域学科又は地域社会学科における取組	11
5	実施計画	15
6	成果の普及のための仕組み	19
7	研究開発概念図	20
8	ロジックモデル	21
II	組織の取組	23
1	過年度の取組	24
2	コンソーシアム	25
3	管理機関及びコンソーシアムにおける主体的な取組について	27
III	研究開発	29
1	事業の実績	30
2	みさこうSTEAM教育	35
(1)	学校設定科目「未咲輝（みさき）学」	35
(2)	みさこうSTEAM教育	37
(3)	県外視察研修	45
3	成果発表会（未咲輝-SENTAN-発表会）	50
IV	評価・分析	53
1	ルーブリック	54
2	目標と実施状況	55
3	次年度以降の課題及び改善点	56
V	資料	57
1	概要説明資料	58
2	未咲輝ゼミ資料	74
3	「今を創る、未来を変えるトライブ」ポスター	104

I 概要

研究開発の概要

実施計画書(普通科改革支援事業)

1 事業の概要

(1) 学際領域学科又は地域社会学科を設置する学校名・設置(予定)年度

公立・私立・ 国立・株立の別	学校名 (ふりがな)	学科の種類	設置(予定) 年度	決定
公立	愛媛県立三崎高等学校 (えひめけんりつみさ きこうとうがっこう)	地域社会学科	令和6年度	○

※学科の種類は学際領域学科又は地域社会学科の別を記載すること。

※設置(予定)年度は令和4年度、令和5年度又は令和6年度を記載すること。

※教育委員会等における決定を経ている等、組織として設置が決定している場合には、「決定」欄に○を付すこと。

(2) 学校の詳細

課程別	新学科の 収容定員	学年制・ 単位制の別	学科の名称(決定している場合)
全日制	60名	学年制	社会共創科

※課程別は、全日制・定時制・通信制の別を記載すること。

(3) 当該学科における特色・魅力ある先進的な教育の取組について

各教科において、「地域社会とつながる授業」と地域連携を軸とした新たな「教科等横断型授業」の実施を二つの大きな柱として取り組み、本校独自のSTEAM教育を実践する。

- ・これまで「総合的な探究の時間」を中心に行ってきた探究活動を、教科等横断的に行い、各教科の学習を実社会と結び付けることで、これまで以上に生徒の学びの自走性を高めるとともに、生徒の進路希望に合わせて一人一人に個別最適化された学習活動を実施する。

例) 理 科：再生可能エネルギーの発電効率の研究

商業科：プログラミングを用いたマーケティング

- ・地域課題の発見や解決へのアプローチなどを通して、これまで以上に地域社会と深くつながり、生徒の資質・能力を高めることで「ブーメラン人材」を育成する。

※ブーメラン人材…再び地域に戻り、進学先や就職先で身に付けた広い視野、高い専門性、豊かな人脈を利用して、生業・事業・産業を創出する人材。求められる資質・能力としては、郷土愛、地域活性化への使命感、課題解決力、ネットワーク構築力、コーディネート力などが挙げられる。

○地域社会とつながる授業

本校では、これまでも「総合的な探究の時間」や学校設定科目「未咲輝（みさき）学」（以下「未咲輝学」という。）で地域と連携して探究活動を行ってきたが、時間数が限られていた。今回、社会共創科の設置に当たり、地域探究活動に関する特色ある学校設定科目「地域文化と国語」（2単位）、「トライブ・ラーニング基礎」（1単位）、「トライブ・ラーニング」（2単位）、「せんたんコミュニケーション学」（2単位）など、地域資源を最大限に生かした、本校でしか学ぶことのできないオンリーワンの授業を展開する。

このことにより、地域社会とより深くつながる取組を実施できる。例えば、県外高校とのオンラインでの定期的な交流や中学校・企業などと連携した地域探究活動、地域の大人を巻き込んだキャリア教育などが挙げられる。また、令和3年度からは専修大学に、さらに令和4年度からは大正大学にコンソーシアムに参加いただき、オンラインによる協働プロジェクトの実施や来県した大学生との交流など、地元地域だけでなく、全国ともつながる探究活動を実施している。その際には、他県に先駆けて配備された1人1台端末を最大限活用し、ウェブ会議システムやチームコミュニケーションツールなどを利用することで、より充実した活動としている。

また、本校独自に、地域人材や外部人材などをリストアップすることにより、「地域特別講師データベース」を作り、地域探究活動の内容にあった人材をすぐに検索し、よりスマートな活動にすることとしている。

以上のような取組を実施することで、郷土愛や地域活性化への使命感など、「ブーメラン人材」に求められる資質・能力の育成につなげるとともに、実社会や日常生活の課題を発見・解決し、変化の激しい社会をたくましく生き抜くことができる人材の育成につなげていきたい。

○教科等横断型授業

これまでのカリキュラムでは、各教科、単元において、教科等横断型授業の計画を作成する際の日程調整が課題となっていた。しかし、各教科においてあらかじめ教科等横断型授業を組み込んだ年間指導計画を作成しておくことで、スケジュールの管理が容易になり、計画的かつ継続的な教科等横断型授業の実施が可能となる。また、現在行っている「未咲輝学」で導入しているデータサイエンスやプログラミング教育なども積極的に取り入れ、科学的な根拠に基づいた課題解決能力の育成にもつなげたい。

また、教科等横断型授業が、異なる教科の単なるコラボレーションになることがないよう、実社会や日常生活における課題を設定し、それを異なる教科の視点から解決していくことを通して、「多面的に学び、考える力」を身に付けさせたい。

以上のような取組を実施することで、新たな価値観や生き方を生み出す「デザイン思考」（他者に寄り添いながら協働していく思考）を身に付け、地域社会とつながることのできる人材の育成につなげていきたい。

2 事業の目的等

(1) 学際領域学科又は地域社会学科を設置する高等学校を取り巻く状況の分析、学際領域学科又は地域社会学科を設置する必要

○本校を取り巻く状況

西宇和郡伊方町唯一の高等学校である本校では、進学や就職を機に都市部へ転出する生徒が多く、地域活動の担い手不足が深刻化している。このような状況の中、本校では、進学先や就職先で身に付けた広い視野、高い専門性、豊かな人脈を地元に戻って活用し、生業・事業・産業を創出する「ブーメラン人材」の育成を目標として、地域との協働活動に積極的に取り組むことができるカリキュラムの開発や、コンソーシアムの構築などに取り組んできた。このような取組を通して、町内における高等学校の立ち位置を、地域の若者を町外へ送り出す「出口」から、町内はもちろん、全国の若者を呼び込み地元への定着率を向上させるとともに、「ブーメラン人材」が他地域とのパイプ役となることで移住者を増加させ、持続可能な地域を創ることができる「入口」へ変化させてきた。

○「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」以前の取組（H27～H30）

主に地域住民や団体など地域側のニーズに応える形で多くの活動を実践し、地域全体を学びの場として捉え、地域課題の解決を目的とした地域探究活動を行うことで、調整力やコミュニケーション力などの生きる力を育んできた。その中で、生徒の主体性を育む活動に重点を置き、県内外の高校生や大学生を招聘し、各地の地域活性化活動事例を発表・共有し、より高度な活動に向けたネットワーク形成の場として、全国の高校生・大学生等と交流を持つ高校生シンポジウム「せんたんミーティング」を主催するなどの取組を行った。一方で、カリキュラムの編成上、体系立った効果に導きづらい側面も見られた。

○「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」での取組（R元～R3）

それまでの課題を踏まえ、生徒の自主的な取組を活動の中心に据えながら、より高度な新カリキュラムの編成や組織の編成に取り組み、「地域理解」「地域課題の発見・解決」「ブーメラン人材の育成」を3年間継続して行うことができる学校設定科目「未咲輝学」の開設・運営を中心とした整備を行った。また、組織づくりとしては町役場や地元NPO団体といった、地域に深く根差した団体に加え、県内外の大学等の教育機関にも参加していただき、地域の実態に即したコンソーシアムを編成した。これらの取組により生徒たちの地域探究活動は、より一層広がりや深みを増すことになった。年度当初と年度末に行っているループブックを用いた生徒の自己評価において、計画力、判断力、実践力、調整力、コミュニケーション力という全ての項目で、年を追うごとに成長が見られた。本校の地域探究活動は、外部人材と関わりながら生徒自身が企画・実践を進めていくという特徴があるため、特に、生徒の計画力、調整力、コミュニケーション力をしっかりと育むことができた。また、平成31年度入試から本格的に県外生徒募集を開始し、本校の教育活動に関心を持った県内外からの入学生が増加したことで、地域からも高く評価していただいております、新しい学校の在り方や教育活動について研究を重ねた。

○必要性

以上のことを踏まえ、「学校」ではなく「地域」という枠組において、生徒一人一人に個別最適な学びをこれまで以上に提供していく必要があると考えている。そのためには、学校内外の多様な人々と関わり、対話しながら、生徒を「社会に生きる一人の人間」としてたくましく育てていくことができる学校づくりを推進していくことが必要不可欠である。「社会とつながり、たくましく生き抜くことができる生徒の育成」を目標とし、外部人材との連携に加え、各教科・科目における単元の縦断化や教科等横断型授業などを柱としたカリキュラムの再編を高いレベルで行っていくためにも、本校が社会共創科を設置する必要性がある。

(2) 学際領域学科又は地域社会学科における取組の目的・目標（学際領域学科又は地域社会学科における教育を通じて育成を目指す資質・能力を含む）

○目的

- ・「社会に生きる一人の人間」として、変化の激しい社会をたくましく生き抜くことができる人材の育成
- ・新たな価値観や生き方を生み出す「デザイン思考」を身に付けることで、地域住民の視点に立った課題やニーズを発見・解決することができる、地域社会とつながる人材の育成

○目標

- ・「ブーメラン人材」を育成することによる、地元への人材の定着率の向上
- ・自らが「ブーメラン人材」として、他地域とのパイプ役となり移住者を増加させることによる、持続可能な地域を作ることができる地域人材の育成
- ・地域課題の発見・解決に取り組む地域探究活動による、生徒自身の進路実現と結び付く仕組の構築

○背景

本校の位置する伊方町は、日本一細長い佐田岬半島の先端に位置し、主な産業は農業や漁業という町である。本校は伊方町の最西端である三崎地区にあり、隣町までは車で40分程度を要する。伊方町は高齢化率が47%を超えており、愛媛県内で2番目に高い自治体である。少子高齢化の急速な進行による年少人口の減少に加え、高校卒業後、進学や就職を機に都市部へ転出する若者が多いことなどが現在の状況を招いている。

○教育を通じて育成を目指す資質・能力

- ・本校は地元をはじめ、県内各地や全国各地から多くの生徒が入学しており、全校生徒の半数以上が寮生活を送っている。このような状況において「地元」や「地域」という言葉の指し示す範囲を再定義するとともに、将来的に日本中に本校及び伊方町の関係人口を増やすことができる好機と捉え、バックキャスト的に現在必要とされる教育活動を行う必要がある。
- ・社会共創科を設置することで達成すべき資質・能力として、「社会に生きる一人の人間」としてたくましく生き抜く力が挙げられる。この力は、少子高齢化や産業の衰退という社会課題最先端地域である伊方町全体を学びの場として、地域人材を外部専門家として定義し、地域と関わり地域の中での探究活動を推進することで、生活に根差した形から育成される。
- ・学校を含んだ伊方町全体を大きな学びのフィールドとした3年間の継続した活動を通して、伊方町への愛着を深め、生涯にわたり本校及び伊方町と関わっていく姿勢も育む。これにより、伊方町の関係人口を増やすことに加え、地域特別講師データベースを継続させ、地域の活性化につなげることができる。
- ・生徒は、自分たちのアイデアが、地域にとって有用か、実現可能か、持続して取り組むことができるかなど、検討・実践・改善を繰り返す中で、課題を発見・解決するための方法や手段を体系化し、汎用性のあるデザイン思考として身に付けていくこととなる。地域探究活動では、地域住民と対話してニーズを聞き取る共感力や対話力、協働的な解決方法のアイデアを生み出す力を育成し、現状をよりよい状況へ改善することを目的に、自らの行動指針を決定できる資質・能力を育成する。
- ・自己理解なくしては、地域を理解し適切に関わることや地域探究活動における適切なゴールの設定は困難である。また、地域探究活動を通して正しく社会と関わっていくためには、その基礎となる教科の力が必要である。しかし、生徒は地域探究活動に必要な力と教科において育成する力とを分けて考えてしまう傾向にある。そこで、自らの地域探究活動の計画やゴールを設定する際に、その達成のために必要な力を各教科において、どのように育成していくのかを生徒自身に考えさせ、成果の検証において振り返らせることで、地域探究活動を核としたより深い教科等横断的な学習を実現するとともに、教科等で身に付けた力を実社会で活用できる力を育成する。

3 実施体制

(1) 管理機関における実施体制や事業の管理方法

○実施体制

(1) 管理機関の役割

三崎高校が社会共創科における教育課程の編成や新しい学校設定科目について検討する際に、新学科のカリキュラムが充実したものになるよう支援することとしている。また、運営指導委員会を設置し、県内外の有識者から指導・助言、成果に関する評価をいただき、本事業の運営に生かしていく予定である。

教職員体制に関する支援もすでに行っており、小規模校で地域探究活動に取り組むことを希望する優秀な教員、三崎高校出身の優秀な教員及び同校勤務年数が長いベテラン教員を配置している。また、同校におけるICT活用に関する教員・生徒への支援のため、ICT教育支援員を県の一般財源で配置している。

(2) コンソーシアムの構成及び役割

「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」で構築された三崎高校のコンソーシアムは、多面的な立場から多くの助言をいただくことによって、教育活動の充実に結び付いており、同事業終了後も、コンソーシアムは継続し、令和4年度からは、大正大学、株式会社Prima Pinguino、株式会社伊予銀行に新たに参入していただいている。

コンソーシアムは、立案された計画や実施状況に基づく助言等を踏まえて、プロジェクト全体に対する提案・支援等を行う。実際の活動において求められる支援としては、事業実施中のプロジェクトに対する新たな視点からの提言や、その実現を可能にする外部人材の紹介・調整等が挙げられる。また、コンソーシアム関係者も各教科の授業や課題研究活動の講師として招くことで、生きた組織として活動していくとともに、三崎高校の教育目標を共有した上で、豊かな学びの土壌を醸成することができるコンソーシアムの編成を目指す。

(3) コーディネーターの配置（委託費）

高校と地域社会の協働体制づくり、地域社会に開かれたカリキュラムづくり、新たな人の流れと多様性ある教育環境づくりなどを行うため、スムーズかつ的確に三崎高校と関係機関をつなぐ「地域魅力化コーディネーター」を令和4年8月1日から雇用している。他県での教職経験や一般企業での海外勤務経験などの豊富な経験を生かし、学校内外で積極的に活動している。

○事業の管理方法

管理機関である愛媛県教育委員会は、これまで「地域に生き地域とともに歩む高校生育成事業」（本県事業）、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」など、地域協働に関する様々な事業の管理・運営に関わってきた。また、本県高校等がSGHの指定を受けた経験や、現在SSHの指定を受けている学校もあるため、これまでに蓄積してきた事業成果やネットワーク等を生かし、三崎高校に助言を行うとともに、本事業において他団体や外部人材を積極的に活用することとしている。

三崎高校では、各年度を3期に分けてスケジュールを立てており、カリキュラム再編の検討のための校内会議を各学期1回の年間3回計画し、長期休業中には校内研修や先進校との情報交換等も計画している。これらのスケジュールを管理し、適切に事業が行われるよう指導するとともに、会議の内容について報告を受け、助言等を行う。

また、運営指導委員として、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」で運営指導委員を委任した方々に加え、大正大学地域創生学部教授である浦崎太郎氏、株式会社Prima Pinguinoの代表取締役である藤岡慎二氏にも加わっていただき、浦崎氏には委員長を務めていただいている。浦崎氏及び藤岡氏からは、社会共創科の教育課程の編成等において、高校と地域との協働の視点から、専門的なアドバイスをいただいている。このように、大学研究者や地域教育の中核となる人材に、指導・助言していただくことで、三崎高校の事業が同校の生徒、教職員だけではなく本県全体の財産となるよう管理・運営する。

※運営指導委員会、コンソーシアム代表者会議ともに年2回以上の開催を予定している。

(2) 管理機関における事業全体の成果検証、評価のための体制、考え方

○事業全体の成果検証について

本事業の成果検証については、以下のことを通して、管理機関が責任を持って行い、三崎高校にフィードバックすることとする。

- ・運営指導委員会及びコンソーシアム代表者会議において、進捗状況の確認及び改善点等を協議
- ・三崎高校が校内成果発表会を開催したり、各種発表会へ参加したりするなど、幅広く情報を発信
- ・愛媛県教育委員会が主催し、県内高校等が、指定を受けた各種事業の取組や、独自の研究実践について発表し、その成果を広く高校生・中学生にまで普及する「えひめスーパーハイスクールコンソーシアム」で、同校が発表により成果を普及
- ・学校及びコンソーシアム等で、学校評価やアンケートを実施
- ・卒業生の追跡調査を行い、特に県外進学者・就職者の動向を調査
- ・ループリックを用いて、生徒個人の振り返りを実施 など

○評価のための体制・考え方

評価については、三崎高校が本事業において目指している「社会とつながり、たくましく生き抜くことができる生徒の育成」が達成されているかに注目し行うこととする。

「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」で構築した校内や運営指導委員会等からの評価体制に加え、地域の人や卒業生、現在交流のある県外の高等学校などにもアンケート等を実施し、より多くの人から客観的な評価をいただき、事業の運営に生かすこととしたい。そのためにも、コンテストや発表会への応募、ホームページやSNS、フリーペーパーなどでの情報発信などを行うこととしている。

また、具体的な成果目標については、目標設定シートにある以下の観点に基づいて行っていくこととする。

- ・生徒による3年間の地域探究活動を通して、地域を担う人材としての資質・能力の向上度
- ・大学等進学者数のうち、将来、地方創生関係の大学・学部等への進学者数
- ・高等学校卒業後及び大学等卒業後の出身地への就職者数の割合

年度末に、成果検証とともにこれらの評価を行い、実施内容やカリキュラムなどを修正し、学校はもちろん、地域や県外の方からも評価していただける学科にしたいと考えている。

※「3-(1)管理機関における実施体制」の補足

本県では、令和4年度から、「えひめ版STEAM教育研究開発事業」を実施しており、三崎高校とも連携し、研究開発を進めている。

(3) 学際領域学科又は地域社会学科を設置する高等学校における事業の管理方

○事業の管理方法

本校が平成 27 年度から築き上げてきた地域探究活動の実施体制において、本事業の管理を行う。本校では、校務分掌として平成 29 年度に地域協働課を立ち上げ、地域探究活動の窓口として活動に取り組んできた。本事業においても、地域協働課を中心とした校内運営組織を作り、事業を推進していく。

○具体的な方策

(1) 地域社会とつながる授業

「総合的な探究の時間」において研究テーマごとに生徒を縦割りにしたグループ（以下、「研究グループ」という。）に、複数の担当教員を配置し、全教職員が地域探究活動に関わることとし、研究グループごとに生徒がオンライン上で活動記録を記入し、担当教員が確認することで活動の記録及び管理を行う。本事業においては、これまで行ってきた地域探究活動の実施体制を基にしながら多様な資質・能力、興味・関心を持つ生徒一人一人が、より主体的に活動することができるよう、個人での地域探究活動の集合としてのグループでの地域探究活動の在り方や、探究サイクルを分割することによる地域探究活動の高密度化などの新たな実施体制づくりに取り組む。

(2) 教科等横断型授業

単元縦断及び教科等横断的な取組を推進していくために、定期考査終了後など、新単元に入るタイミングにおいて、校内カリキュラム検討委員による検討会を開く。また、毎年校内で実施している研究授業において、教科等横断的な内容による研究授業を、年に複数回実施することで、教職員の研修の機会を確保する。

(3) 地域協働課員の役割

地域協働課員は、必要な外部人材の紹介・調整を行ったり、研究グループごとの連携を図ったりするなど、担当教員をサポートする。また、研究グループの担当教員や代表生徒が定期的に進捗状況等を話し合う場を設定することで、各研究グループがスムーズな情報交換を行い、それぞれ連携したり、サポートし合ったりしやすい環境を作っていく。さらに、本事業において設置されるコーディネーターと連携を取ることで、これまで以上に校内外の人材の交流を促進する。生徒を活動の中心に置き、複数の担当教員がサポートし、その外側で地域協働課がサポートしながら、研究活動全体をマネジメントしていく。また、各研究グループでの代表生徒が、学校の代表として地域おこし活動を行う「せんたん部」を運営し、月に 1 回程度情報交換会を行う。

(4) コーディネーターの役割

外部とのハブになり、地域における探究活動をスムーズに実施できるように外部人材と連携する。さらに、開かれた学校としてコンソーシアムをはじめとした地域や関係者の方々に本事業を含めた、学校活動全体のサポートを行う。

月に 2 回程度、授業担当教職員とコーディネーターが、「総合的な探究の時間」や「未咲輝学」等における探究学習の進捗状況の報告及び今後の活動方針を練るための会議を実施する。また、コーディネーターは職員室に常駐し、探究学習がより効果的なものになるよう、日頃から密に教職員や地域の方などと情報交換を行う。

(4) 管理機関及び申請校における研究開発の実績（申請校が新設校の場合、管理機関における実績のみを記載）

- 「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」以前の実績（H27～H30）
 - ・地域の和菓子店との協働で新たな特産品となる地元佐田岬産の温州みかんを用いた「みっちゃん大福」を研究開発（H27）。のちに、「こんなのあるんだ！大賞 2019」大賞を受賞（R元）。
 - ・漂着物であるブイ（魚等の養殖で使う直径 30 センチメートルほどのプラスチック製の浮き）を中心とした漂着物を再利用し、地域の方と協働して制作したブイアート作品「登龍門」が「えひめ愛顔（えがお）のこども芸術祭」でグランプリとなる県知事賞を受賞（H28）。
※この取組は現在の生徒にも受け継がれ、アート作品の制作だけではなく、ブイを使ったスポーツイベント「ブイリンピック」を開発し、地域のイベントや地元中学校の運動会で実施されている。また、大分県で開催された楽しみながら環境について考えるイベント「おおいたうつくし感謝祭」において、令和3年度からブイアート作品を出展するなど、現在も活動の幅を広げている。
 - ・高校生シンポジウム「せんたんミーティング」を立ち上げ、高知県立須崎高等学校、香川県観音寺市の高校生まちづくりグループ、愛媛県立野村高等学校、愛媛大学、名城大学、尾道市立大学等の、高校生・大学生を招聘し活性化事例を共有するシンポジウムを行い、生徒自らが、準備（手配・広報・会場設営等）や当日運営（司会・受付・機器類オペレーション・まちあるき）などを実施（H29～）。
 - ・生徒自らが地域住民へのインタビューや調整をはじめとした制作業務を担うとともに、上映会の実施運営も行った地域PRのための短編映画「せんたんビギンズ」の撮影及び上映（H30）。
- 「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の実績（R元～R3）
 - ・町内の一つの集落全体を舞台と見立てて各研究班がそれぞれの研究成果を発表する「せんたん劇場」を開催（R元）。
 - ・廃校となった地域の中学校を舞台に 15 以上の外部団体と二つの高校に参加してもらった「みさこうマルシェ（廃校活用イベント）」を開催（R元）。
 - ・地元の海水から自分たちで精製した塩を使って開発したオリジナルスイーツを提供する「みさこうcafé」をオープン（R2）。
 - ・「えひめ地域づくりアワード・ユース 2020」最優秀賞を受賞（R2）。
 - ・「第3回ダルメイン世界マーマレードアワード&フェスティバル日本大会」金賞並びにベストカテゴリー賞・銅賞を受賞（R3）。
 - ・「EGFキャンパスアワード」優秀賞（R2・R3）・三浦工業賞を受賞（R3）。
 - ・「第8回ディスカバー農村漁村（むら）の宝」特別賞【先端発信賞】を受賞（R3）。
 - ・「第12回地域再生大賞」優秀賞を受賞（R3）。
- 「新時代に対応した高等学校教育改革推進事業（普通科改革支援事業）の実績（R4・R5）
 - ・「ダルメイン世界マーマレードアワード&フェスティバル日本大会」銀賞並びに銅賞を受賞（R4・R5）。
 - ・日本財団 海と日本 PROJECT「愛媛の海 釣ってさばいて甲子園 in 三崎」を開催（R4・R5）。
 - ・日本財団 海と日本 PROJECT「マリンチャレンジプログラム」支援対象研究認定（R4）。
 - ・エシカル甲子園 2022「私たちが創る持続可能な社会～つなぐ、つながる、ミライのエシカル～」四国ブロック第2位（R4）。
 - ・「今を創る、未来を変えるトライブ～Engage the present, Shape the future.～」を開催（R5）。
 - ・「全国高校生『地域の自然』甲子園（ネイチャー甲子園）」生きもの調査部門動物の部第3位
 - ・「いやしの南予 BBQ 甲子園」最優秀賞を受賞。

※本校の取組は県内外から高い評価を得ており、本校での地域探究活動に魅力を感じた志願者が全国から入学しており、生徒数の増加にもつながっている。

(5) 運営指導委員会の体制

所属	氏名	主な実績
大正大学地域創生学部	浦崎 太郎	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」 企画評価会議 座長
愛媛大学社会連携推進機構	秋丸 國廣	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」 運営指導委員
株式会社Prima Pinguino	藤岡 慎二	総務省地域力創造アドバイザー 産業能率大学経営学部 教授
いよぎん地域経済研究センター	森 洋一	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」 運営指導委員
文部科学省総合教育政策局	西村 久仁夫	
佐田岬半島ミュージアム	高嶋 賢二	
伊方町役場総合政策課	谷村 栄樹	
伊方町教育委員会事務局 佐田岬半島ミュージアム	阿部 茂之	
伊方町立三崎小学校	黒田 立史	
伊方町立三崎中学校	野村 雅英	

(6) 運営指導委員会が取り組む内容

- 運営指導委員会は、年に2回以上開催し、事業の運営や実施状況等について専門的見地からの指導・助言、成果に関する評価をいただく。生徒一人一人の能力・適正、興味・関心等に応じた学びを実現するためには、地域社会との協働活動は必要不可欠であり、その実現のための実施体制の構築支援等に特に注力していく。
- 大学研究者や地域教育の中核となる人材に参加していただくことで、三崎高校の事業が普通科改革の実現及び高校魅力化の先進事例として、同校の生徒・教職員はもちろんのこと、愛媛県全体の財産となるよう管理・運営する。

4 学際領域学科又は地域社会学科における取組

(1) 学際領域学科又は地域社会学科におけるカリキュラムや教育方法等の特色・魅力ある先進的な教育の内容（学校設定教科・科目の詳細は別添1「学校設定教科・科目の設定に関する説明資料」に記載。）

○本事業における本校の目的

- ・「社会に生きる一人の人間」として、変化の激しい社会をたくましく生き抜くことができる人材の育成
- ・新たな価値観や生き方を生み出す「デザイン思考」を身に付けることで、地域社会とつながる人材の育成

これらを実現するために、各教科において「地域社会とつながる授業」と、地域探究活動を軸とした新たな「教科等横断型授業」の実施を大きな柱としている。これらの取組を進める中で、外部専門家や地域人材等との協働体制の構築に取り組むとともに、本校独自のSTEAM教育を実践し、生徒に幅広い視点を身に付けさせることを目的としている。

○地域社会とつながる授業

- ・「総合的な探究の時間」の活用
 - 地域探究活動の深化
 - 地域を生かしたキャリア教育
 - 中学校と連携した地域探究活動
- ・学校設定科目「未咲輝学」（総合）
 - 地域理解（地域の歴史や地元企業について学ぶ）
 - データサイエンスを学び、「RESAS（地域経済分析システム）」や「e-Stat（政府統計の総合窓口）」などのビッグデータの利活用
 - 地域探究活動や起業家育成プログラムなどを実施
 - ※データサイエンスを学び、ビッグデータを用いて、地域課題をエビデンスに基づいて分析することで、地域探究活動や起業に関する学びを深めることができる。
- ・県内外高校との連携（現在、宮崎県立飯野高校や立命館宇治高校等と連携中）
- ・大学や企業との連携
- ・その他の特色ある学校設定科目
 - ◆「トライブ・ラーニング」（総合）：持続可能な地域づくりの観点から課題解決方法を考える力（デザイン力）を育成
 - ◆「せんたんコミュニケーション学」（総合）：情報収集、分析、活用能力やICT活用能力を育成
 - ◆「地域文化と国語」（国語）：地域の伝承や文学者を教材とし、吟行や拓本などの体験活動を実施

○教科等横断型授業（社会をたくましく生き抜く人材の育成）

- ・年間指導計画に組み込み、計画的に実施
- ・実社会や日常生活の課題について、異なる教科からアプローチ
- ・「多面的に学び、考える力」を育成
- ・本校独自のSTEAM教育を実施
- ・教科等横断型授業の例
 - 「言語文化（韻文学）」→国語×英語×美術×数学
 - 「環境」→理科×商業×芸術 など

(2) コンソーシアム等の関係機関等との連携・協力体制の構築の考え方・方法

- 「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」において構築したコンソーシアムを基に、本事業でも関係機関との連携・協力体制を構築する。令和元年度に8団体でスタートした本校コンソーシアムは、令和3年度には12団体、令和4年度以降は15団体で構成し、地域探究活動を通して多くの人々につながり、協力体制を築くことができている。コンソーシアム関係者は、年に2回の会議だけではなく、オンラインを活用した遠隔授業、学校設定科目「未咲輝学」での特別授業、放課後活動である「未咲輝ゼミ」など積極的に教育活動に参画している。また、コンソーシアム関係者とは、令和4年度から定期的にオンライン等も活用しながら臨機応変にコミュニケーションを図っており、今後も継続していく予定である。本事業においては、本校の特色である地域とつながる地域連携授業や、地域を軸とした教科等横断型授業の推進のため、「総合的な探究の時間」や「未咲輝学」以外の各教科の授業においても、コンソーシアム関係者に積極的に参加していただくことになっている。また、学校外での活動では、地域行事やインターンシップなど、地域探究活動における生徒の受け入れをコンソーシアム関係者に依頼することを計画している。
- 本事業で配置されたコーディネーターが、コンソーシアムなどの外部との連絡・調整等の業務を担うことで、担当者の負担軽減及び本事業のスムーズな運営が可能になっている。また、コーディネーターは、関係機関との連携・協力体制の構築において重要な役割を果たすことから、業務内容や、地域人材の活用方法等の詳細については、各種研修会などに積極的に参加することで他県の先進校や大学関係者等から情報を収集し、より効果的な運用ができるよう研究を行っている。

(3) コンソーシアムの構成員

所属	氏名	主な実績
愛媛大学	笠松 浩樹	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」 コンソーシアム構成団体
専修大学	大崎 恒次	
大正大学	浦崎 太郎	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」 企画評価会議 座長
一般社団法人佐田岬Sプロジェクト	宇都宮 圭	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」 コンソーシアム構成団体
NPO法人さだみさき夢希会	田村 義孝	
NPO法人二名津わが家亭	増田 克仁	
佐田岬みつけ隊	黒川 信義	
一般社団法人E. Cオーシャンズ	岩田 功次	
MIGACT	濱田 規史	
株式会社Prima Pinguino	藤岡 慎二	総務省地域力創造アドバイザー 産業能率大学経営学部 教授
株式会社伊予銀行	松岡 健夫	金融教育講演会講師
伊方町役場総合政策課	宮本 廉	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」 コンソーシアム構成団体
伊方町教育委員会委事務局	矢野 喜久	
愛媛県教育委員会高校教育課	川本 昌宏	
公営塾未咲輝（みさき）塾	関本 岳朗	

(4) 配置するコーディネーターの属性や役割

所属	氏名
愛媛県立三崎高等学校	石本 冨 (いしもと さえ)

※必要に応じて行を追加すること。

当該者の主な実績

石本氏は、他県での教職経験や一般企業での海外勤務経験などの幅広い経験を生かし、校内外を問わず、新事業に係る校内諸行事の企画立案や外部人材との連絡・調整などを行っている。具体的には、「総合的な探究の時間」や「未咲輝学」のアップデート、地域探究活動に関する新しい学校設定科目「トライブ・ラーニング」等の立案、地域特別講師データベースの構築などを行っている。また、本校教員や生徒とともに、本校の魅力を全国の中学生に向けた発信をするなど、精力的に活動している。

※7行以内で記載すること

コーディネーターが取り組む内容（勤務形態を含む）

○取り組む内容

- ・社会共創科における新しいカリキュラムの研究開発を行う。
- ・「地域社会とつながる授業」と「教科等横断型授業」の年間指導計画と実施内容の検討を行う。
- ・伊方町3地区に配置されている伊方町のコーディネーターと連携を図り、情報共有を行いながら、それぞれの地区の課題解決に向けて活動する。また、それぞれの地区に担当教員を配置し、地域、学校、コーディネーターの三者が常に連携をとることで、充実した地域と学校の連携・協働の推進に取り組んでいく。
- ・地域探究活動を行う際、コンソーシアムなどの外部機関との連絡・調整を行う。
- ・地域探究活動における教員・生徒のサポートを行う。
- ・「地域みらい留学」などにおいて、県外生徒募集活動のサポートを行う。
- ・本校独自の「地域特別講師データベース」を立ち上げ、その運用を行う。
- ・社会共創科での地域探究活動などについて、ホームページやSNS、メディア等で情報発信を行う。 など

○勤務形態

- ・勤務時間：1日7時間、週5日、35時間の勤務
- ・三崎高校の職員室に常駐する。校務分掌が割り当てられており、地域協働課の一員として、地域探究活動の企画・準備・運営などに、地域協働課員をはじめとする教職員や地域住民とともに取り組んでいく。また、コンソーシアム構成員と定期的な意見交換を行う場を設定し、円滑な業務の実施をサポートする。

(5) 学際領域学科又は地域社会学科の設置及び設置に向けた検討に関する生徒、保護者、地域等への説明の実施

生徒・保護者へは、本校で実施する「中学生一日体験入学」、各中学校での高校説明会、一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム主催「地域みらい留学」、本校HP・SNS (Instagram等) による説明を行うとともに、地域の方々へは、シンポジウム (運営指導委員やコンソーシアムの参加者の中から6名程度の方に依頼) や学校評議員会等での説明会を実施した。また、校外でのフォーラム等に積極的に参加し、社会共創科の説明を行っている。説明の中では次の内容で、今後の三崎高校の方向性を明確に打ち出している。

○新学科へ変更する目的

伊方町では、少子高齢化が急速に進み、人口減少、高齢化率の上昇は、大きな課題となっている。そこで、伊方町では平成28年度から「伊方町まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、「伊方町移住定住促進協議会」を発足させるなど、町ぐるみで人口流出対策に取り組んでいる。

本校も、伊方町唯一の高校として同協議会の構成メンバーに加わり、伊方町と連携し魅力化創出活動に取り組んできた。また、令和元年度から「地域との協働による高等学校改革推進事業(地域魅力化型)」による取組を行ってきたが、「総合的な探究の時間」と学校設定科目「未咲輝学」の中での学習が中心であった。

今回、社会共創科の設置に当たり、特色ある学校設定科目を新たに設置し、探究的な学習や体験活動等を通じ地域社会と協働しながら、地域課題の発見、解決に必要な資質・能力を育成する地域探究活動を充実させることとしている。

このような地域探究活動を通じて、生徒は、社会をたくましく生き抜く力や「デザイン思考」を身に付け、地域社会とつながる人材に成長すると考えている。

○特色ある新学科と教育課程及び進路指導

現在、就職・専門学校進学希望者、文系大学等への進学希望者、理系大学等への進学希望者に対応した3種類のコースに分かれて教育課程を編成している。

今回、社会共創科の設置に当たり、現在あるコースの内容を見直し、地域探究 (地域に根差した探究活動を核として各教科において探究的な活動を主とした学習活動を行うコース)、人文探究 (地域探究活動や探究的な活動を基に主として人文社会学分野の学習を行うコース)、科学探究 (地域探究活動や探究的な活動を基に主として科学分野の学習を行うコース) とし、多様な生徒のニーズに応えていくこととしている。また、三崎高校社会共創科が特に力を入れる「地域社会とつながる授業」と「教科等横断型授業」により、課題解決力や論理的思考力等を身に付けることができるとともに、学びの強い動機付けとなり、学習意欲がアップし、進路実現の一助となる。また、地域探究活動を通して向上が期待できる、論文を作成する力やプレゼンテーション力などは、各種推薦入試等で重要な要素となる。

5 実施計画

(1) 3ヶ年の実施計画の概要

○令和4年度（1年目）

- ・コーディネーターを配置し、すでに伊方町3地区に配置されているコーディネーターや本校教員と連携させることで、高校をハブとした連携組織を作成する。
- ・コーディネーターと地域協働課の教員が中心となって、地域人材をリストアップした本校独自の「地域特別講師データベース」を作り、講師を登録し、授業や地域探究活動などへ派遣するためのスケジュール調整等を行う。また、作成したデータベースを活用して、地域と連携した学習活動を各科目で年間1回以上行う。
- ・年間指導計画を見直し、「教科等横断型授業」を組み込むことで、現在の教育課程の中において、「総合的な探究の時間」及び「未咲輝学」と各教科の連携授業などを実施する。
- ・本事業に係る新たな活動の企画・立案を行う。（「みさこうゼミ」、「イベントカレンダーワークショップ」、「job フェア in みさこう」などを計画。）
- ・社会共創科における令和6年度入学生の教育課程の研究及び編成を行う。校内のカリキュラム編成委員会で、大学関係者など外部の専門家の助言を受けることで、生徒にとってベストな教育課程を編成する。
- ・令和6年度入学生には、学科名やカリキュラムなどの構想が固まった時点で、中学校の説明会やホームページ、SNSなどで、特に中学2年生とその保護者に、強くアピールしていく。地域に対しても、伊方町役場等から協力を得ながら、広報活動をしていく。

○令和5年度（2年目）

- ・本格的に、新学科の詳細及び特色を中学3年生とその保護者に向けて、アピールする。現在行っている本校の中学生一日体験入学や各中学校の説明会での情報発信に加え、本校独自の説明会を行うなどして、積極的に新学科設置の趣旨とその魅力の普及に努める。
- ・新学科の教育課程を完成させ、愛媛県教育委員会に申請する。
- ・「みさこうゼミ」、「イベントカレンダーワークショップ」、「job フェア in みさこう」などを実施する。
- ・「地域社会とつながる授業」と「教科等横断型授業」について、前年度の改善点などを抽出し、校内のカリキュラム検討委員会等で協議する。
- ・「今を創る、未来を変えるトライブ」を開催する。

○令和6年度（3年目）

- ・社会共創科を設置する。
- ・新しい教育課程での授業実践や、地域探究活動などの教育活動を行いながら、その効果や改善点などの確認を行っていく。
- ・1年間を通しての長期の検証に加え、各学期で中期的なPDCAサイクルを構築することで柔軟に修正を加えながら、生徒や学校、地域の実態に合った社会共創科へとブラッシュアップしていく。
- ・本事業のコーディネーターの役割や業務内容、伊方町のコーディネーターとの連携についても、実態に即した運用ができるよう関係者で定期的に協議する。
- ・「地域特別講師データベース」についても、事業全体の必要性を図りながら積極的に新しい人材の開拓を行う。

(2) 令和5年度実施内容

月	事業の内容	
	カリキュラムや教育方法等の開発	関係機関等との連携・協力体制の構築
4月	<ul style="list-style-type: none"> ・「総合的な探究の時間」についてのガイダンス 	
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・未咲輝学Ⅰ「地域理解」スタート（1年生） ・未咲輝学Ⅰ「地域めぐり」活動スタート（1年生） ・未咲輝学Ⅱ「RESAS」スタート（2年生） ・未咲輝学Ⅲ「起業にむけて」スタート（3年生） ・保小中高合同防災訓練実施（全学年） ・地域の行事「はなはな祭り」に参加（希望者） 	<ul style="list-style-type: none"> ・佐田岬半島ミュージアム 高嶋賢二氏、前田美和氏、佐田岬みつけ隊 黒川信義氏を講師として招聘 ・佐田岬半島ミュージアム 高嶋賢二氏、前田美和氏、佐田岬みつけ隊 黒川信義氏を講師として招聘 ・伊予銀行、伊方町役場と連携協働 ・伊予銀行、MIGACT 濱田規史氏と連携協働 ・三崎保育所、三崎小・中学校、三崎地区自主防災組織及び消防団と協働 ・伊方町観光交流拠点施設「佐田岬はなはな」との連携
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・「ソーシャルチャレンジ for High School 事業」の実施（1年生） ・未咲輝学Ⅲ「インターンシップ」実施（3年生） 	<ul style="list-style-type: none"> ・三崎保育所、社会福祉法人伊方社会福祉協会（つわぶき荘）との連携協力
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・未咲輝学Ⅰ「ブイアート」実施（1年生） ・第1回コンソーシアム実施 ・第1回運営指導委員会実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・一般社団法人佐田岬Sプロジェクト 宇都宮圭氏を講師として招聘
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・「瀬戸の夕凧祭り」参加（希望者） 	<ul style="list-style-type: none"> ・伊方町役場瀬戸支所と連携協働
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・未咲輝学Ⅱ「インターンシップ」実施（1年生） ・「job フェア in みさこう」実施 ・みさこうフェスティバル開催（全学年） ・みさこう郷土芸能部活動スタート（希望者） 	<ul style="list-style-type: none"> ・伊方町内を中心とした企業 ・伊方町役場、各地域企業等と連携 ・三崎保育所、三崎小学校、三崎中学校、伊方中学校と協働 ・三崎地区青年団と連携協働
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・オープンハイスクール開催（1年生） ・エネルギー教室（発電所見学）実施（1年生） ・未咲輝学Ⅱ「地方創生☆政策アイデアコンテスト2024」プラン提出（2年生） 	<ul style="list-style-type: none"> ・四国電力と連携 ・伊予銀行、MIGACT 濱田規史氏と連携協働

11月	<ul style="list-style-type: none"> ・みさこう郷土芸能発表（希望者） ・未咲輝学Ⅰ「地域理解」ポスター掲示（1年生） ・未咲輝学Ⅱ「RESAS」ポスター掲示（2年生） ・未咲輝学Ⅲファイナルプレゼンテーション開催（3年生） 	<ul style="list-style-type: none"> ・三崎地区青年団と連携協働
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・進路相談会 ・福祉教室実施（1年生） ・森林教室実施（2年生） ・「今を創る、未来を変えるトライブ」の実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・南予地方局及び地域の企業と連携 ・伊方町役場、社会福祉法人伊方社会福祉協会と連携 ・南予地方局と連携 ・同窓生、地域企業・行政、大学教授との連携
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・地域教育実践南予ブロック集会参加（希望者） ・「愛媛・南予の柑橘農業システム」参加（希望者） 	
2月	<ul style="list-style-type: none"> ・「未咲輝-SENTAN-発表会」開催（全学年） ・グローバルリーダーズ summit 参加（希望者） ・エネルギー教室実施（1年生） ・第2回コンソーシアム実施 ・第2回運営指導委員会実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・各連携団体と連携協働 ・宮崎県立飯野高校と連携協働 ・四国電力と連携
3月	<ul style="list-style-type: none"> ・「みさこう仕事図鑑」発行（2年生） ・「イベントカレンダーワークショップ」実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域人材と連携 ・地域団体と連携協働

(3) 事業の進捗状況の定期的な確認や改善の仕組み(事業のアウトプットやアウトカムの考え方、目標指標の設定は別添2「目標設定シート」に記載。)

○教育活動全般について

- ・ 学校長のリーダーシップの下、全教職員で共通認識を図りながら学校で一丸となって、本事業をスムーズに運営できるよう努める。
- ・ 各学期末には、職員会議等で進捗状況の確認や実施事業の振り返りを行う機会を設ける。
- ・ Teams などのチームコミュニケーションツールを用いることで、気付いたことや提案等をいつでも気軽に共有できる校内の仕組み作りを行う。
- ・ 本事業の進捗状況や打ち合わせの内容、生徒及び教職員からの提案、授業研修会で出た意見などは運営指導委員会・コンソーシアムで共有し、多くの人から評価及び助言をいただくことで、事業の進捗状況の確認及び改善を図る機会とする。

○授業について

- ・ 校内の2クラスを指定した一般公開の「焦点授業」を実施し、地元中学校の教職員にも参観していただき、その後、授業研修会を実施する。
- ・ 「焦点授業」のうち、1クラスは「地域社会とつながる授業」を実施し、授業改善や教員、生徒の意識改革につなげる。

(実践事例)「言語文化」

『奥の細道』を学習後、伊方町出身で現代を代表する俳人である坪内揆典について学習を行うとともに、実際に俳句を作り鑑賞するという授業を行った。作成した俳句を令和5年度から伊方町教育委員会が開催している「佐田岬トーク」に投句した。佐田岬トークは2か月に1回開催されているが、その後も継続的に投句する生徒もおり、これまでに1名が特選、3名が入選するなど、生徒の意欲の高まりが感じられた。

- ・ 「焦点授業」のうち、もう1クラスは「教科等横断型授業」を行い、実社会や日常生活の課題をテーマに、異なる教科の複数の教員で横断的な授業を行う。

(実践事例)「数学Ⅰ×地学基礎」

地域の特徴的な石材である緑色片岩(通称「青石」)が、伊方町全ての地下に埋まっていると仮定し、既習の公式などを用いてその埋蔵量と価格を計算するという授業を行った。生徒たちは、数学の考え方を実生活の中に当てはめることにより数学を身近なものとして捉えるとともに、地域の地形や地質に関心を持つきっかけとすることができていた。

- ・ 「焦点授業」の様子等は本校ホームページやFacebookを活用して、随時情報発信していく。
- ・ 生徒を対象としたアンケートを年2回実施して、授業の評価を行い、その結果を基に改善を行う。

○「総合的な探究の時間」及び学校設定科目「未咲輝学」について

- ・ 月初めと月末に授業担当教職員及びコーディネーターによる打ち合わせを実施する。
- ・ 月初めの会では、1か月の活動スケジュールを確認し、月末の会では、進捗状況及び今後の活動方針の報告を行い、年間スケジュールにおける進捗状況等を確認する。
- ・ 必要に応じて、学校を代表して活動する「せんたん部」の生徒も交えた打ち合わせを行う。その際、「せんたん部」の生徒が各研究グループの進捗状況や要望事項等を報告することで、地域探究活動を「自分ごと」として捉え、自走性を高める機会とする。
- ・ 生徒が記入するチャレンジシート(地域探究活動において自らに必要な力を、各教科でどのように身に付けるかを記入するシート)による振り返りを基に評価及び改善を図る。

6 成果の普及のための仕組み

- 本校では、「総合的な探究の時間」の研究発表会を年に2回（中間発表会、成果発表会）実施している。中間発表会は、本校文化祭に合わせた研究成果ポスターの作成及び掲示、成果発表会はオンライン配信を含めた対面での発表である。また、公共施設を使用しての出前発表会やオンライン発表会などを積極的に行い、より多くの人に成果を普及できる発表会の在り方を研究していく。また、例年、生徒は各種シンポジウムやプレゼン発表会に参加させていただき、本校の取組を発表する機会を得ている。今後も、それらの発表会等への参加に加え、できるだけ多くの生徒が成果発表を行うことができる機会を作っていきたい。
- 地域探究活動の研究成果を普及するための工夫として、平成29年度から開催している高校生シンポジウム「せんたんミーティング」の実施によるイベント形式の情報発信や、令和元年度から作成しているフリーペーパー「せんたん新聞」による刊行物による情報発信、本校ホームページやFacebook等による即時性の高い画像・動画による情報発信などが挙げられる。これまでに本校が行ってきた様々な情報発信ツールの更に効果的な活用法などを研究していきたい。地元地域への情報発信は対面による方法を、他地域への情報発信はオンラインによる方法を中心に研究を進める。
- 地域の子どもたちは地域で育てるという共通認識の下、近隣の高等学校と高校生コンソーシアムを構築し、その成果を発表し合うなど地域内での横の連携の強化を図ることで、成果の普及に努めていきたい。

7 国の指定終了後の取組継続のための仕組み

○持続的な取組について

- ・平成27年度から実施している地域探究活動において、本校が培ってきたノウハウや、これまでに築いてきた外部人材とのつながりを基盤にしながら、本事業で新たに構築される支援体制を維持するために、校内研修を行うことで、持続可能な組織づくりを行う。
- ・本校地域協働課員やコンソーシアム構成員等が中心となり、ノウハウや校内研修の内容、研修方法などを整理していく。外部人材とのつながりについては、本事業で立ち上げた「地域特別講師データベース」の継続的な運用により、引き継いでいくこととする。
- ・全教職員が関わる中で研修を積み、全教職員が「自分ごと」として捉えることができるよう、意識改革を行う。
- ・指定終了後のコーディネーターの配置について、県や伊方町と協議する。

○資金面について

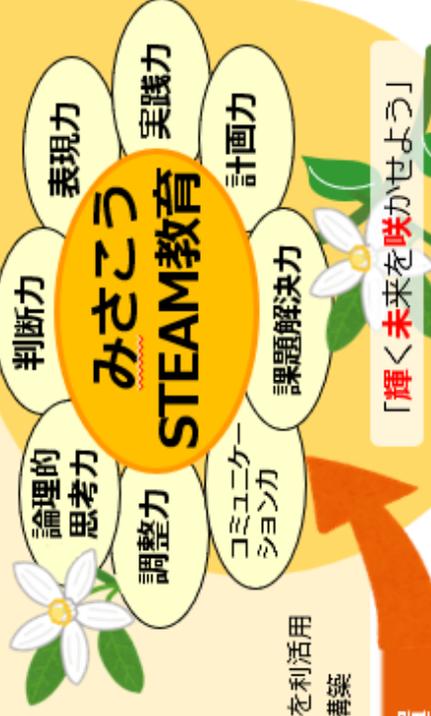
- ・同窓会と連携して、「みさこう基金（仮称）」を設立し、同窓生を中心に広く呼びかけ、地域探究活動の資金源としたい。
- ・話題性がある題材や規模が大きな活動については、クラウドファンディングなどを活用し、資金調達と情報発信を同時に行う。
- ・財団の助成事業などに応募し、支援を得る。 など

管理機関名：愛媛県教育委員会

令和4年度～令和6年度 新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）

【愛媛県立三崎高等学校】社会共創科（令和6年度設置）

- 変化の激しい社会を生き抜くことができる人材の育成
 - > 地域探究活動を通じた「生きる力」の育成
 - > 教科横断的な学びによる「多面的に学び、考える力」の修得
- 地域社会の課題やニーズを発見し解決できる人材の育成
 - > 「ブーマラン人材」の育成による地元への人材定着率の向上
 - > 地域社会の創り手となるリーダーの育成
- みさこうSTEAM教育・キャリア教育の推進
 - > データサイエンスやプログラミング教育を学び、RESASなどのビッグデータを活用
 - > 地域課題の発見、解決に取り組み探究活動が、進路実現と結びつく仕組みの構築



「輝く未来を咲かせよう」

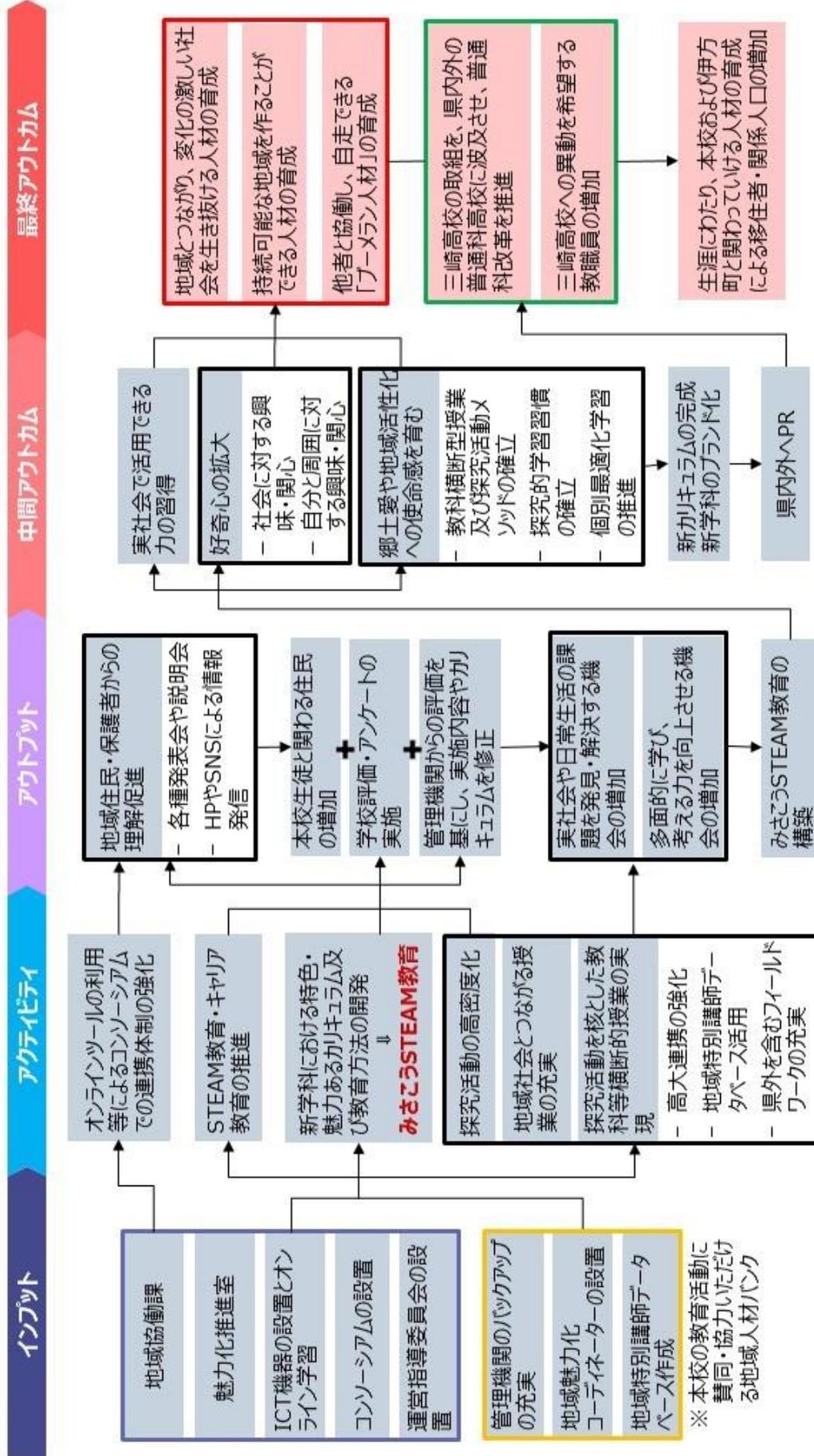
社会共創科

これまでの8年間の地域探究活動の取組を基盤とした、先進的な「社会共創科」を設置

オンリーワンのカリキュラムを開発 → オンリーワンの連携をさらに強化



愛媛県立三崎高等学校 普通科改革支援事業ロジックモデル Ver.2



II 組織の取組

1 過年度の取組

本校では、平成 27 年度に「土曜授業推進事業」の指定を受け、土曜日を年間 10 日開校日とし、教育活動を実施した。本校の伝統として、体育祭や文化祭をはじめとした学校行事への地域住民の参加率が高い。また、地方祭等の地域諸行事においても、本校の生徒がその担い手として参加するなど、地域との関わりが非常に強い。そこで、その計画段階において、教科指導だけでなく、地域活動を取り入れることにした。それまで、本校は担当課や部活動単位で、それぞれ地域活動に取り組んでおり、学校全体として取り組むような体系的なシステムが確立されていなかった。そのため、週に 1 時間の「総合的な学習の時間」に、学校全体として地域連携活動に取り組むよう、「総合的な学習の時間」に取り組む地域活性化事業を「三崎おこし」と名付け、カリキュラムの見直しを行った。1 年生「地域理解学習」、2 年生「地域活性化プランの作成」、3 年生「地域活性化プランの実践」とし、「総合的な学習の時間」に加え、開校土曜日の 2 時間を使って年次進行で「三崎おこし」に取り組むこととした。また、研究グループごとに教員を配置することで、生徒、教職員ともに「学校全体で地域協働活動に取り組む」という意識が醸成された。

平成 28 年度には「地域に生き地域とともに歩む高校生育成事業」、平成 29 年度には「コミュニティースクール推進校」、平成 30 年度には「地域を担う心豊かな高校生育成事業地域活性化プロジェクト」の指定を愛媛県教育委員会より受け、地域協働活動の研究に取り組んできた。4 年間の取組を通して、本校卒業生や地域住民、各種団体と連携して活動する機会が増加し、多くの人に本校の取組を知っていただくとともに、地域との協働による活動への協力体制を確立することができた。

さらに、平成 28 年度から本校は、「伊方町まち・ひと・しごと創生総合戦略」の中核事業として設立された「伊方町移住・定住促進協議会」の構成メンバーとして連携活動を行っている。具体的には、同協議会の会議への参加に加え、同事業の「次世代人材育成事業」として、伊方町、伊方町教育委員会に後援していただき、学校という枠を越えた町全体でのシンポジウムを開催したり、東京で行われた「特産品フェア」に本校生が帯同し、町の PR を行ったりするなど、地域を担う学校として伊方町と連携して多くの活動に参加してきた。

令和元年度から令和 3 年度においては、文部科学省より「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」の指定を受け、これまで、それぞれの場面での地域協働活動で育まれた学校と地域の結び付きを軸に、より組織的、継続的な取組を行っていくための組織である「コンソーシアム」を編成することにした。コンソーシアムは地域の人を中心に組織し、様々な立場、視点からの指導・助言を行ってもらうことで、本事業の効果的な実施を行っていくとともに、コンソーシアムメンバー同士の連携を深めることも目的とした。初年度は、8 団体にコンソーシアムに参加していただいたが、令和 3 年度からは 12 団体に、令和 4 年度からは 15 団体に参加していただいております、より多くの人に本校の活動に関わっていただくことができた。

上記のように、本校が本事業採択前より取り組んできた地域との協働活動において積み上げてきた経験や、そこから得られた学びは、生徒、教職員と校内全体のそれぞれの立場の間で共有され、地域や外部人材との連携を生み出してきた。

2 コンソーシアム

(1) 概要

「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」で構築された三崎高校のコンソーシアムは、同事業終了後も継続しており、令和4年度から、大正大学、株式会社 Prima Pinguino、伊予銀行の3団体に新たに加わっていただいた。コンソーシアムでは、立案された計画や、実施状況に基づく助言等を踏まえて、プロジェクト全体に対する提案・支援等を行っており、多面的な立場から多くの助言をいただくことによって、教育活動の充実に結び付いている。具体的には、実施中のプロジェクトに対する新たな視点からの提言や、その実現を可能にする外部人材の紹介・調整等が挙げられる。

令和4年度からは年に2回の会合に加え、オンラインを利用して定期的な情報共有を図ることでスムーズに連携しており、学校外での活動では、コンソーシアム関係者に対して、地域行事やインターンシップなどの地域探究活動において生徒の受け入れを依頼した。

また、コンソーシアム関係者が各教科の授業や課題研究活動の講師を務めるなど、三崎高校の教育目標を共有した上で、豊かな学びの土壌を醸成することができるコンソーシアムを目指して活動した。

令和5年度は7月と2月の2回開催し、これまで築いてきた協力体制を再確認できた。また、本校の特色である地域とつながる地域連携授業や、地域を軸とした教科等横断型授業の推進のため、「総合的な探究の時間」や「未咲輝学」を中心に学習活動にも積極的に参加していただいた。

コンソーシアム参加団体一覧（順不同、敬称略）

所属	氏名	主な実績
大正大学	浦崎 太郎	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」企画評価会議 座長
株式会社 Prima Pinguino	藤岡 慎二	総務省地域力創造アドバイザー 産業能率大学経営学部 教授
株式会社伊予銀行	松岡 建夫	金融教育講演会講師
愛媛大学	笠松 浩樹	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」コンソーシアム構成団体
専修大学	大崎 恒次	
一般社団法人佐田岬Sプロジェクト	宇都宮 圭	
NPO 法人さだみさき夢希会	田村 義孝	
NPO 法人二名津わが家亭	増田 克仁	
佐田岬みつけ隊	黒川 信義	
伊方町役場総合政策課	宮本 廉	
伊方町教育委員会委事務局	矢野 喜久	
一般社団法人 E.C オーシャンズ	岩田 功次	
MIGACT	濱田 規史	
愛媛県教育委員会高校教育課	川本 昌宏	
公営塾未咲輝塾	関本 岳朗	

(2) 第1回コンソーシアム

ア 期日 令和5年7月3日(月)

イ 参加者

浦崎 太郎氏(大正大学)、笠松 浩樹氏(愛媛大学)、
大崎 恒次氏(専修大学)、宇都宮 圭氏(佐田岬Sプロジェクト)、
田村 義孝氏(さだみさき夢希会)、増田 克仁氏(二名津わが家亭)、
黒川 信義氏(佐田岬みつけ隊)、矢野 喜久氏(伊方町教育委員会事務局)、
岩田 功次氏(E.Cオーシャンズ)、藤岡 慎二氏(Prima Pinguino)、
松岡 健夫氏(伊予銀行)、関本 岳朗氏(未咲輝塾塾長)、
野村 竜也主幹(県教委)、中村 紗喜子指導主事(県教委)、
中井 賢哉校長、中西 薫教頭、西村 浩則事務長、
津田 一幸教諭、河野 雄太教諭、
高岡 仁哉教諭(記録)、石本 冴コーディネーター

ウ 開会行事

エ 本事業の概要説明と生徒活動報告

(ア) 新学科に係る教育課程について

(イ) 未咲輝ゼミについて

(ウ) トライブ・ラーニングについて

(エ) 今後の取組について

(オ) その他

- ・イベントスケジュール・ワークショップ
- ・Jobフェア in みさこう(地元企業の就職率アップ)
- ・佐田岬観光公社との商品開発

オ 研究協議

(ア) 未咲輝ゼミについて

(イ) 総探カフェ班の活動について

(ウ) セミナーについて

(エ) 生徒の活動について

(オ) OB・OGとの協働について

(3) 第2回コンソーシアム

ア 期日 令和6年2月15日(木)

イ 参加者

浦崎 太郎氏(大正大学)、大崎 恒次氏(専修大学)、
宇都宮 圭氏(佐田岬Sプロジェクト)、田村 義孝氏(さだみさき夢希会)、
増田 克仁氏(二名津わが家亭)、黒川 信義氏(佐田岬みつけ隊)、
宮本 廉氏(伊方町役場)、藤岡 慎二氏(Prima Pinguino)、
松岡 健夫氏(伊予銀行)、関本 岳朗氏(未咲輝塾塾長)、
細川 昌弘魅力化推進監(県教委)、中村 紗喜子指導主事(県教委)、
石口 孝次(未咲輝塾)、横山 理人(未咲輝塾)、
中井 賢哉校長、中西 薫教頭、西村 浩則事務長、
津田 一幸教諭、羽田 智紀教諭、
越智 仁美講師(記録)、石本 冴コーディネーター

- ウ 開会行事
- エ 事業報告
 - (ア) 「今を創る、未来を変えるトライブ」
 - (イ) カリキュラム開発
 - (ウ) 未咲輝ゼミ（放課後ゼミ）
 - (エ) みさこう STEAM 教育
 - (オ) その他の取組
 - (カ) 来年度の取組
- オ 研究協議
 - (ア) カリキュラム・新しい学校設定科目について
 - (イ) 「今を創る、未来を変えるトライブ」について
 - (ウ) 未咲輝ゼミについて
 - (エ) OB・OG との協働について

3 管理機関及びコンソーシアムにおける主体的な取組について

- (1) 職員体制に関する支援
 - ア 小規模校で地域活性化活動に取り組むことを希望する優秀な教員の配置
 - イ 本校出身の優秀な教職員の配置や、本校勤務年数が長い経験豊富な教員の配置
- (2) 取組内容に関する支援
 - ア 生徒のグローバルな視点の習得支援（海外留学等にいたる指導）
 - イ 生徒のコミュニケーション能力の向上支援（県教育委員会によるえひめスーパーハイスクールコンソーシアム in 南予の参加支援）
 - ウ 伊方町による本校地域活性化に関する特別授業における講師謝礼、旅費の令達
 - エ 伊方町による本校地域連携探究活動（せんたん book 制作）印刷物制作費用全額補助
 - オ 一般社団法人佐田岬 S プロジェクトによるブイアートプロジェクトにおける活動支援
 - カ NPO 法人さだみさき夢希会による「みっちゃん大福」の普及及び販売活動（特産品の開発）における活動支援
 - キ 愛媛大学によるアントレプレナーシップ教育（課題解決カリキュラムの開発）における活動支援
 - ク 専修大学による「総合的な探究の時間」における活動支援
 - ケ 佐田岬みつけ隊による歴史や文化を中心とした地域研究活動（地域資源活用プログラム）における活動支援
 - コ NPO 法人二名津わが家亭による地域活動拠点の提供
 - サ 株式会社伊予銀行による起業教育支援
 - シ 一般社団法人佐田岬観光公社との協働による商品開発

(3) 成果普及のための支援

えひめスーパーハイスクールコンソーシアム in 南予の開催（1月25日）発表校及びパネルディスカッションパネリストとして参加

※愛媛県教育委員会が主催し、県内高校等が、指定を受けた各種事業の取組や、独自の研究実践について発表し、その成果を広く高校生・中学生にまで普及する「えひめスーパーハイスクールコンソーシアム」で、同校が発表により成果を普及

(4) 運営に関する支援

ア 運営指導委員会の開催

年2回実施（7月3日、2月15日）

イ コンソーシアムの開催

年2回実施（7月3日、2月15日）

ウ えひめスーパーハイスクールコンソーシアム in 南予の開催（1月25日）

Ⅲ 研究開発

1 事業の実績

(1) 事業の実施日程

事業項目	実 施 日 程		
	月	月	月
みさこう郷土芸能 運営指導委員会 コンソーシアム 令和6年度教育課程委員会	令和5年5月～ 令和5年7月3日 令和5年7月3日 令和5年5月19日 令和5年12月12日 令和6年2月2日	令和6年2月15日 令和6年2月15日 令和5年7月14日 令和5年1月23日	令和5年9月11日 令和6年1月15日
未咲輝学Ⅰ「地域理解」	令和5年4月12日 令和5年9月7日 令和5年12月7日	令和5年6月1日 令和5年9月28日 令和6年1月25日	令和5年6月22日 令和5年10月26日
未咲輝学Ⅱ「RESAS」 未咲輝学Ⅲ「起業に向けて」	令和5年6月～ 令和5年6月～		
エネルギー教育 Jobフェア in みさこう インターンシップ 中学生1日体験入学 みさこうフェスティバル 企業説明会 林業教室 福祉教室	令和5年10月5日 令和5年9月8日 令和5年9月12日 令和5年10月14日 令和5年10月15日 令和5年11月8日 令和5年12月7日 令和5年12月7日	令和6年1月30日 令和5年9月13日	令和5年9月14日
今を創る、未来を変えるト ライブ 県外視察研修（宮崎県） 地域教育実践南予ブロッ ク集会 令和5年度えひめスーパ ーハイスクールコンソー シアム 日本農業遺産「愛媛・南予 の柑橘農業システム」フォ ーラム 未咲輝-SENTAN-発表会	令和5年12月18日 令和6年1月20日 令和6年1月20日 令和6年1月25日 令和6年1月28日 令和6年2月15日	令和5年12月19日 令和6年1月21日	

(2) 成果及び課題

ア コーディネーターの配置

令和4年8月1日から雇用。他県での教職経験や一般企業での海外勤務経験などの幅広い経験を生かし、校内外を問わず、新事業に係る校内諸行事の企画立案や外部人材との連絡・調整などを行っている。具体的には、令和6年度からの「総合的な探究の時間」や学校設定科目「未咲輝学」のアップデート、地域探究活動に関係する新しい学校設定科目の立案、地域特別講師データベースの構築などを行っている。また、本校教員や生徒が共に、本校の魅力を全国の中학생に向けて発信をするなど、精力的に活動している。

令和4年度の勤務実績や教職員のコーディネーター研修への参加を通して、よりスムーズに連携を取ることができるようになった。特に令和6年度以降開講予定の学校設定科目の学習内容の検討や、「未咲輝ゼミ」のシステムづくり等、新学科の設置の柱となる分野で力を発揮してもらうことができた。しかし、令和4年度に引き続き1名のみの配置であるため、やはり業務内容が多岐にわたることによる負担を軽減することが難しかった。令和5年度は、延べ4人の教職員がコーディネーター研修等に参加したが、来年度以降も校外研修等に積極的に参加したり、校内研修で全教職員の共通理解を図ったりするなどして、一層の連携を推進していきたい。

イ 運営指導委員会

令和5年度は2回開催し、事業の運営や実施状況、学校設定科目の内容や「未咲輝ゼミ」の運用等について専門的見地から指導・助言、成果に関する評価をいただいた。特に第2回の運営指導委員会では、「未咲輝ゼミ」の枠組み作りと事業の持続可能性について活発な意見交換がなされ、令和6年度の実施に向けて貴重な意見をいただくことができた。

今年度においては、授業等において協働することができた運営指導委員は一部の委員に留まったため、来年度は、より多くの運営指導委員と授業や行事において協働できるよう、各活動の計画段階から密に連絡を取り合うなどして、積極的な連携の在り方を模索したい。

ウ コンソーシアム

令和5年度は2回開催し、これまで築いてきた協力体制を再確認できた。コンソーシアム関係者には、「総合的な探究の時間」や「未咲輝学」、特別授業など日頃から積極的に教育活動に参画していただいている。本事業においては、本校の特色である地域とつながる地域連携授業や、地域を軸とした教科等横断型授業の推進のため、「総合的な探究の時間」や「未咲輝学」以外の各教科の授業においても、コンソーシアム関係者に積極的に参加していただくことになっている。また、学校外での活動では、地域行事やインターンシップなど、地域探究活動においてコンソーシアム関係者に生徒を受け入れていただいている。

エ オンライン・コンソーシアム

令和4年度に引き続き、年2回の対面による会議だけでなく、オンラインツールを利用して授業の打ち合わせや諸行事の案内などの連絡を定期的に取り合うことで、事業を円滑に推進することができた。

令和6年度は、より活発な意見交換ができるよう、連絡を取る頻度を増やすとともに、効果的なオンラインツールの活用法などについても研究したい。

オ 校内教育課程検討会

コース編成と単位数の見直しを中心に、校内での教育課程検討会を7回実施した。(通常は年2回の実施。)また、全体での検討会以外にも担当者による打ち合わせを適宜実施した。

現在、2年次からのコース選択は、就職・専門学校への進学を主としたI型と、四年制大

学への進学を主としたⅡ型（文科系・理科系）の2類型3コース編成であるが、社会共創科の設置に伴い、令和6年度入学生から、地域探究、人文探究、科学探究の3コースへと再編成した。生徒の興味・関心のある探究分野に合わせたコース選択となり、どのコースからも進学・就職が可能となっているため、生徒の学びに向かう力を高めることができると考えている。

それに合わせて運営指導委員の方から助言をいただいたり、他県の先進的なカリキュラムを参考にしたりしながら、現在の週33単位から週29単位まで減らした教育課程とした。削減した時間に「未咲輝ゼミ」等において地域人材と協働して探究的な活動を行ったり、公営塾「未咲輝塾」との連携を一層深めたりするなどして、地域社会に根差した上で、より生徒一人一人の興味・関心に合わせた個別最適な取組を行っていく予定である。

また、「トライブ・ラーニング」や「せんたんコミュニケーション学」という新たな学校設定科目を設置し、探究活動や教科等横断的な授業を行うことで、変化の激しい社会を生き抜くことができる生徒を育てていきたい。

令和6年度には1年生と2、3年生が単位数の異なる教育課程で学習する予定だったが、学校行事の実施や委員会活動、課外活動等の時間の調整が課題となることが予想されたため、2、3年生の教育課程を見直し、30単位に変更してそれらの課題を解消した。

カ 中学生1日体験入学・みさこう茶屋（簡易体験入学）

中学生1日体験入学に52組、みさこう茶屋に32組が参加した。体験授業や在校生との座談会、面談等を通して、本校と伊方町の魅力をアピールしたところ、特に学区外（愛媛県南予地域以外）の参加者から多くの反響をいただいた。

キ 令和5年度えひめスーパーハイスクールコンソーシアム

南予地区の先進的な取組を行っている学校の事例発表を聞いたり、パネルディスカッションに参加したりすることで、本校の取組について考えを深めることができた。また、他校の生徒との関わることで、今後の取組において新たな連携を取る際の参考となった。

ク 未咲輝学Ⅰ「地域理解」

「佐田岬半島ミュージアム」の高嶋賢二氏と前田美和氏、地域活動団体である「佐田岬みつけ隊」の黒川信義氏を講師に招き、講義やフィールドワークなどを計8回開催した。「佐田岬みつけ隊」には、令和5年度1年生6名が参加し、自主的に地域活動に参加している（2、3年生を含めると15名が参加）。2、3年生のうち2名は、令和5年7月にオープンした「佐田岬半島ミュージアム」でのガイド講座を受講し、ボランティアガイドとして活動するなど、連携が進んでいる。

今年度は、地域実習に加え、原子力発電所や風力発電用風車が立地している地域の特色を生かしたエネルギー教育、少子高齢化が進む地域の中で重要な役割を果たしている介護職への理解を深める福祉教室など、様々な切り口から地域理解活動を進めてきた。多くの地域人材、団体の協力を受け、専門的で充実した活動を行うことができた。その一方で、授業の時間調整や外部人材とのスケジュール管理に多くの時間が割かれることにもなった。令和6年度は、コーディネーターをハブとした連絡体制を確立したり、それぞれの事業の振り返りを基に再度スケジュール調整を行ったりするなどして、負担軽減に努めたい。

ケ 未咲輝学Ⅱ「RESAS」

ビッグデータを活用した地域経済分析システムである「RESAS」を活用した授業を行った。地域経済の流れを感覚で捉えるのではなく、実態を視覚的に情報収集、分析することで地域の姿を客観的に捉えることができるようになり、「総合的な探究の時間」等の探究活

動でを行う際にも効果的であった。

「未咲輝学」は、各学年団が担当しており、「RESAS」担当者も毎年変更になることが多い。そのため、担当者は年度当初に使用方法を前もって習得し、生徒への指導方法を考えなければならず、負担が大きいという課題が見られた。令和5年度は、それらの反省を踏まえて、年度当初に校内研修を行い、学年団が「RESAS」の使用方法を習得することで、担当者の負担を減らしつつ、効果的に生徒の活動をサポートすることができた。

コ 未咲輝学Ⅲ「起業に向けて」

生徒一人一人がライフプランを作成し、そのライフプランを基に「仕事」や「働く」ということについて考えた上でビジネスプランを作成することで、実社会に即した学習となるように工夫した。今後も継続的に取り組んで、社会とつながる効果的な学習活動を行うことができるよう、関係団体と協働していきたい。そのためにも、コンソーシアム団体等の協力を得ながら、地域の起業家を中心として多くの人の話を聞くことのできる機会を増やすとともに、新たなネットワークを構築していきたい。

サ 県外視察研修

令和6年1月19日～21日に、生徒2名が2泊3日で宮崎県立飯野高等学校主催「全国グローバルリーダーズ summit」に参加して、全国から集まった多数の高校生と交流を深めた。県外の先進校視察を通して、組織作りや情報発信の方法など様々な面で多くの学びを得た。

シ みさこうフェスティバル

吹奏楽部の演奏のほかに「みさこう応援団」「みさこう体操 115」などの有志生徒が参加し、三崎小学校体育館で開催した。来場した地域住民をはじめ多くの方々から賞賛の言葉をいただくなど、生徒が自己肯定感を高め、学校と地域の距離がさらに近づく機会となった。

ス job フェア in みさこう

2年生を対象に9月に実施し、伊方町内の企業・社会人を中心に9団体が参加した。生徒たちが3団体のブースを回り、企業の説明やその仕事を選んだ経緯・やりがいなどを聞くことで、仕事に対して新たな視点を持つことができた。

令和6年度は、近隣の中学校も招待し、地域の企業理解、「ブーメラン人材」の育成につなげていきたい。

セ 企業説明会

1、2年生を対象に11月に実施し、伊方町役場や南予地区の地元企業等を中心に20団体が参加した。生徒たちが4団体のブースを回り、企業の説明を聞くことで、地元企業の理解へとつながった。

ソ みさこう郷土芸能

地域の青年団の方に指導していただき、地域の伝統行事の伝承活動を行った。校内行事や本校主催のイベントだけでなく、地域や県外のイベントにも多数参加した。地域を盛り上げるとともに、伝統文化継承の意義を実感する取組となった。

令和5年度は、実際に地方祭に参加することで、本活動の目的である地域文化の継承に貢献することができた。

タ 「今を創る、未来を変えるトライブ」

令和6年度から始まる新しい学校設定科目「トライブ・ラーニング」及び「せんたんコミュニケーション学」のキックオフとして設定したサミットであり、「地域資本を活用した学習によって、地域の価値を再認識し、地域とつながり、変化の激しい社会を生き抜くことが

できるける人材を育成する」ことをコンセプトに、参加生徒の「チームビルディング力」や「コンテキスト・シフティング力」の向上を目標にしている。

令和5年12月18日、19日に開催し、アドバイザーに大正大学教授の浦崎太郎氏とOne Young World Japanの大久保公人氏を迎え、メンターとして専修大学准教授の大崎恒次氏、愛媛大学教授島上宗子氏、准教授の笠松浩樹氏、(株)イリス代表取締役の宮内菜奈子氏、WORLD ROAD CEOの市川太一氏、(株)Culmony代表取締役の岩澤直美氏に参加いただいた。また、県内外7校から参加した28名の生徒が、学校の枠を越えた6班を編成し、地域ガイドの協力を得て、伊方町の6集落でフィールドワークを行い、その成果として各集落の広報用動画を作成し、「佐田岬ワンダービューコンペティション」に応募した。

来年度からは、参加校・参加生徒は公募し、メンターとして愛媛大学やAPU(立命館アジア太平洋大学)の学生に参加していただく予定である。



チ 未咲輝ゼミ

令和6年度からの本格始動を見据え、令和5年度は2つのゼミを開講した。来年度から10講座程度の開講を予定している。

(ア) 佐田岬みつけ隊-地歴部-

「佐田岬半島ミュージアム」の高嶋賢二氏と前田美和氏、「佐田岬みつけ隊」の黒川信義氏を講師に招き、月2回の校内での活動と土日のフィールドワークを基本に、今年度は26回実施し、15名の生徒（1年生6名、2年生4名、3年生5名）が参加した。

また、「佐田岬みつけ隊」の活動にも参加させていただき、ゼミで調査・作成した松森城のジオラマを発表し、毎日新聞でも取り上げていただいた。



(イ) Basic Medical Fitness&Personal Stretch

「伊方町地域おこし協力隊」の大木喜知氏を講師に招き、2学期から月1回程度、計9回実施し、運動部のマネージャーを中心に10名（1年生3名、2年生3名、3年生4名）が参加した。

最後の講座では、バレーボール部を対象に「体幹トレーニング講座」を実施した。来年度は、全運動部を対象にしたトレーニング講座も予定している。

ツ その他の地域協働活動

(ア) 31 miles プロジェクト

令和4年度末から始まったプロジェクトである。(一社)佐田岬観光公社と(有)timsの協

力を得て、マーケティングや原価計算等の講座を受け、佐田岬をイメージしたパフェを考案した。4月30日に開催された「風と海のマルシェ」で30個を限定販売したところ、30分程度で完売した。

令和5年度は、「総合的な探究の時間」における「つくもて班（つくってもてなす班）」が、京都市でチーズケーキの製造・販売を行っている「パパジョンズ」とコラボし、伊方町の特産を使ったチーズケーキを考案し、2月に試作品が完成した。

(イ) 芸術同好会×二名津わが家亭

令和4年度から実施している「二名津わが家亭に作品を飾ろう」は、令和5年度は1回のみの実施だったが、芸術同好会の生徒が計画から飾り付けまでを行った。令和6年度以降、回数を増やしていきたい。



(ウ) 井野浦あみだ会との交流

7月9日、井野浦の高齢者サロンあみだ会主催の餅つき大会に希望者8名が参加し、お餅を丸めたり昔の井野浦の話を聞いたりして、高齢者と交流した。今後、家庭クラブや授業等での交流も図っていきたい。

テ 未咲輝-SENTAN-発表会

令和5年度は、伊方町役場大会議室にて開催した。本校関係者をはじめ、中学生や地域住民、近隣の高校等から116名にお越しいただいた。また、オンラインで配信することで、多くの人に参観していただくことができ、本校の取組を多くの人に発信する機会となった。

これまで「地域課題の発見・解決」を中心において探究活動を行ってきたが、本校生徒は探究活動に限らず、様々な活動を通して地域との結び付きが非常に強く、郷土愛が十分に醸成されている。そのため「地域課題の発見・解決」にとどまらず、その過程で得た知識や学びを、実社会や自分自身の興味・関心のある分野においてどう生かしていくのかということを中心とした探究活動を生徒が実施していけるよう、令和6年度は探究活動の在り方や校内システムの見直しを行っていく予定である。

2 みさこうSTEAM教育

(1) 学校設定科目「未咲輝学」

系統的かつ持続的な地域協働活動の取組を行っていくために、令和元年度に、3年間の系統的な授業を通して「ブーメラン人材」として必要な力を育成することを目標として、週に1時間、学年ごとにテーマを決めて探究活動を行う学校設定科目「未咲輝学」を開講した。本事業の指定を受け、変化の激しい社会をたくましく生き抜くことのできる人材の育成、地域社会とつながる人材の育成を目指して、内容の見直しや外部人材との連携の強化を行った。

1年生は、「地域理解」をテーマに、地域の史跡・施設の見学及び調査・研究等や、エネルギー教育、SDGs学習、インターンシップ等を行った。地域の特色や地域資源をこれまで以上に有効活用するために、佐田岬半島ミュージアムや地域活動団体、四国電力などの外部団体と連携を深め、体系的に探究活動に取り組み、専門的な助言をしていただくことで、より深く地域理解を行うことができた。

令和5年度は、新型コロナウイルス感染症の収束に伴い、インターンシップを再開した。町内の企業を中心に約60団体が受入れを承諾くださり、その内の30団体で3日間にわたり実施した。

地域資源を最大限に活用するには、実際に現地を訪れたり、見識のある人に話を聞いたり

する必要がある。そのために十分な時間を確保し、生徒がより多くの体験をする機会を作ることが、教職員の重要な役割である。今年度は授業時間の確保に取り組み、その結果、各団体との調整等に係る時間が増加した。令和6年度は、負担を減らしつつさらにスムーズに活動できるよう、再度実施内容を検討していきたい。

2年生は、「地域課題の発見・解決」をテーマに活動を行った。地域課題を経済的側面から考察するために、グループごとにテーマを設定して、経済産業省と内閣官房（まち・ひと・しごと創生本部事務局）が提供している「RESAS」を用いて研究を進め、「地方創生☆政策アイデアコンテスト」に応募するプラン作りに取り組んだ。その後、他の場面での活動においても、生徒が自主的に、「RESAS」を活用して情報の収集や分析を行ったり、他分野でのデータサイエンスを活用した探究活動を行ったりするなど、ICT活用能力やデータサイエンス分野への関心の高まりを感じることができた。「未咲輝学」の授業は、それぞれの学年団の教職員が指導を行っているため、毎年担当者が変わることが多い。そのため、年度ごとに自ら「RESAS」の使い方を学び、生徒に指導する教員が必要となっており、それが担当者の負担増にもつながるといった課題が見られた。令和5年度は、「RESAS」の使い方について校内の教職員研修を行うことで、多くの教職員が「RESAS」を扱えるようになり、特定の教職員に負担が集中するという課題の解消を図ることができた。令和6年度は、「未咲輝学」で身に付けた「RESAS」の知識を各教科の授業でも活用させていきたい。

3年生は、ビジネスプランを作成した。その際、単にビジネスプランを作るのではなく、3年間の高校生活やこれまでの人生を振り返り、自己と対話する時間を多く取ることで、自己と社会とのつながりや関わり方について見つめ直す活動とした。「起業」だけに留まらず、多くの社会人や企業人と交流し、「仕事」に対する多様な視点や価値観を育成するために、より一層の外部人材との連携の必要性を感じた。

3年間の活動を通して、地域の職業人と連携することで地元企業への理解を深め、より地域に根差したキャリア教育を行っていきたい。そのためには、従来1年次の9月に固定していたインターンシップの時期を希望に合わせて変更したり、複数企業でのインターンシップを可能にしたりするなど、コンソーシアム構成員と協働して、柔軟な取組を検討したい。そうすることで、地域の魅力を発見し、地域にUターンする「ブーメラン人材」や、地域経済を支え地域の新たな雇用を創出する起業家の育成を目指していきたい。

(2) みさこうSTEAM教育

愛媛県教育委員会高校教育課職員による学校訪問研修に合わせ、全ての授業でSTEAMの観点を取り入れた授業を行った。

ア 実践事例1「数学I」×「情報I」

数学科（数学I）学習指導案

		授業者	
学科	学年・組	日時	教室
単元		データの分析	内容のまとめ
単元の目標	(1) 各代表値の定義を理解する。 (2) 複数の種類のデータを散らばりや変量間の関係などに着目し、解決の過程や結果を批判的に考察できるようになる。 (3) 仮説検定の考え方を理解できるようになる。 (4) 複数の種類のデータを、データの分析の考え方を元に分析しようとする。	指 1 データの整理 導 2 データの代表値 計 3 データの散らばりと四分位数 画 4 分散と代表値 5 2つの変量の間の関係 6 仮説検定の考え方 7 まとめの演習 (本時)	データの分析 1 時間 1 時間 3 時間 3 時間 2 時間 2 時間 1 時間
単元の評価規準	知識・技能 ① 箱ひげ図に必要な数値を求め、箱ひげ図を書くことができる。 ② 分散、標準偏差を計算で求めることができる。 思考・判断・表現 ① データの代表値を用いてデータの散らばりを判断することができる。 ② 仮説検定の考え方を理解している。 主体的に学習に取り組む態度 ① 複数の種類のデータを、様々な考え方で分析しようとしている。 ② 何を1とするかによってデータの見た目が変化することに興味を持つようとしている。		

本時の指導

主題（教材）	まとめの演習			
前時の課題	仮説検定の考え方			
本時の目標	データの見方には様々あることを理解する。			
評価規準	お互いのデータの分析方法が異なることに興味を持つようとしているか。（思・表・判、主体性）			
指導過程	学習活動	時間	指導上の留意事項	
	導入	5	令和2年度国税調査、就業状態等基本集計を、表計算ソフトを用いて分析することを理解する。	
	展開	1	20	生徒ごとに階級幅を指示する。 Excelでの作業の手間がかかるため随時生徒のフォローを行う。
		2	10	生徒ごとに階級幅を指示する。 Excelでの作業の手間がかかるため随時生徒のフォローを行う。
		3	5	生徒ごとに階級幅を指示する。 Excelでの作業の手間がかかるため随時生徒のフォローを行う。
4	5	生徒ごとに階級幅を指示する。 Excelでの作業の手間がかかるため随時生徒のフォローを行う。		
整理	5	生徒ごとに階級幅を指示する。 Excelでの作業の手間がかかるため随時生徒のフォローを行う。		
備考				

情報科（情報Ⅰ）学習指導案

授業者

学科	学年・組	日時	教室	使用教科書
----	------	----	----	-------

単元	データの分析(3)		内容のまとめ	データの分析
単元の目標	(1) 各種データを分析する際に、コンピュータを使用し、その基本的なデータの形式について理解する。 (2) 各データの関係性を認識し、表計算ソフトを利用して計算した各代表値を分析の際に正しく活用し、分析する。 (3) 情報を収集する際にオープンデータなど信頼性の高いデータを活用する。	指 導 計 画	第4編 「情報通信ネットワークとデータの活用」	
			第3章 データの分析	
			48 さまざまなデータ	1時間
			49 データの分析(1)	2時間
			50 データの分析(2)	2時間
			51 データの分析(3)	3時間
				(本時はその2時間目)
単元の評価規準	知識・技能	① 2変量の相関を表した散布図の特徴を捉え、相関係数を予想することができる。 ② 相関関係を見て正負の相関を理解している。 ③ データの代表値等、様々な値をExcelで計算できる。		
	思考・判断・表現	① 相関係数を見て、その相関関係について考察する。 ② 相関係数の値以外でわかることを考え、考察する。		
	主体的に学習に取り組む態度	① 積極的に考察に取り組み、結論に向けて他と協力することができる。 ② 疑似相関の原因となる情報を積極的に収集している。		

本時の指導

主題（教材）	データの分析において冷静に判断する能力を身に付ける。			
前時の課題	散布図と相関係数について正しく理解する。			
本時の目標	2変量のデータに関して散布図や相関係数を求め、相関関係について理解させる。また、データの相関係数から2変量に因果関係が本当に存在するのか考えさせ、疑似相関の概念について学習させる。			
評価規準	数学や情報Ⅰの授業で得た知識をもとに2変量の関係性について考察し、他の生徒と積極的に意見を交換し、意見をまとめることができる。（思考・判断・表現）			
指導過程	学習活動	時間	指導上の留意事項	評価方法、資料等
	導入	5	・本時の目標を確認し積極的に取り組ませる。	
	展開	15	・データを調べることになった経緯について説明し、背景を理解させる。 ・データの散布図から推測した数値を利用してExcelで相関係数を計算させる。	・演習プリント 【評価方法（知・技）】
	開	20	・データの相関について検証し、グループで意見を出させる。 ・2変数に因果関係があるかどうかについて意見交換させる。	・演習プリント 【評価方法（思・判・表）】 ・グループ活動での様子 【評価方法（主）】
整理	10	・本時の学習を通して得た経験を通して、他のデータについて検証する姿勢を身に付けさせる。	・演習プリント	
備考				

イ 実践事例2 「公共」×「ホームルーム活動（人権教育）」

公民科（公共）学習指導案

授業者

学科	学年・組	日時	教室	使用教科書
単元	法的な主体となる私たち	内容のまとめ	自立した主体としてよりよい社会の形成に参画する私たち	
単元の目標	(1) 私たちが生きる社会には、様々なルールや社会規範があることを理解させる。 (2) 法と道徳・慣習との共通点と相違点を学び、法は変更する仕組みを備えていることを理解させる。また、法は個人の権利尊重と社会秩序の維持という役割をもち、時代や状況の変化に対応してよりよいものにしていくことについて認識させる。		指導計画	1 法や規範の意義と役割 4時間 (本時はその3時間目) 2 契約と消費者の権利・責任 2時間 3 司法参加の意義 1時間
単元の評価規準	知識・技能	① 個人の権利を尊重し、社会秩序を維持するためのルールや社会規範などについて理解できる。 ② 契約のあり方や消費者主権の考え方について、理解できる。		
	思考・判断・表現	法は国家による強制力をもつことを理解し、民主主義国家では選挙によって選ばれた代表で構成される議会で決定することや、公平で平等なルールを作るために主権者が努力し続けることの意義について考察できる。		
	主体的に学習に取り組む態度	18歳で成年になる意義をふまえて、契約の意味や責任を負うことについて学び、自分にとって必要な契約かを慎重に考えることができる。		

本時の指導

主題（教材）	自由・平等と法・規範				
前時の課題	教科書 p. 50～53 を読み、本時の学習プリントを作成しておく				
本時の目標	すべての人が固有の存在意義を有するかけがえのない人格として平等であることを理解し、認識させる。				
評価規準	現実の社会にある差別的事例に対して、憲法の知識を使って適切に批判し、解決策を提示できる。（思考・判断・表現）				
指導過程	学習活動	時間	指導上の留意事項	評価の方法・資料等	
	導入	10	・朝鮮学校への授業妨害行為に対して裁判で損害賠償が命じられたことについても簡潔に説明する。	・ヘイトスピーチに争点をあてた法務省作成の啓発ポスター（教科書 p. 50）	
	展開	1 道徳・宗教と法との違いを認識する。	5	・戦前の日本における宗教弾圧の一例を紹介する程度にとどめ、深入りしない。	【評価方法（思・判・表）】 ・学習プリントの内容 ・観察
		2 憲法における自由権の規定をグループでまとめる。	8	・精神的自由、経済的自由にはどのような内容があるか理解させる。	【評価方法（思・判・表）】 ・グループで協力してまとめる
		3 憲法で禁止される差別の意味を理解し、現実の差別の事例を認識する。	12	・身近な差別の事例を考えさせ、発表させる。	【評価方法（主体的）】 ・自分の考えを整理し、発表する
4 家族に対する差別や性的少数者に対する差別について判例を読んで認識する。	5	・ライフスタイルの変化について触れ、生活の中でどうすればお互いを平等に扱っていきけるようになるか考えさせる。			
整理	すべての人の自由と平等を守るためにどうすべきかを考える。	10	・数人の生徒に意見を発表させる。	【評価方法（主体的）】 ・自分の考えを整理し、発表する	
備考					

ホームルーム活動指導案				
日時				
学級			指導者	
主題	自分の周りに目を向けよう			
主題設定の理由	入学して半年が経ち、様々な活動や行事を通して多くの人と関わってきた。他人との価値観や養育環境の違いにより生じる考え方の違いをどのように受け止め、理解した上で他人と接することができるかを考えさせる。			
本時の目標	① 自分の良さ与他人の良さとはどう異なるのかを考えさせる。 ② 自分や他者が持っている価値観をそれぞれ理解させる。			
事前の準備・指導	世の中にはどのような差別があるかを考察させる。			
活動の過程と内容		時間	指導上の留意点	機器・資料
活動の開始	知っている差別について共有する。	5	<ul style="list-style-type: none"> どのような差別があるかを互いに共有させる。 人間の輪 P, 22~P, 41 に書いてある差別を確認させる。 	・プリント
活動の展開	1 過去にあった冤罪事件から、差別意識が招く問題点について考える。	15	<ul style="list-style-type: none"> 差別意識を持つことにより、偏見や思い込みが生じる可能性があることを理解させる。 	・人間の輪
	2 自分が気付いていない部分で差別が起こっていたり、人を傷つけていたりしていないかを考える。	15	<ul style="list-style-type: none"> 自身の言動を客観的に考えさせる。 受け止める側の気持ちに立って考えるよう注意させる。 	
	3 認識や考え方の違いから起こる差別を防ぐには何が大切か考える。	10	<ul style="list-style-type: none"> 出た意見を否定しないよう注意させる。 	
活動のまとめ	本時のまとめと次時の予告をする。	5	<ul style="list-style-type: none"> 受容の精神が重要となることを考えさせる。 	
評価の観点	1 人権とは何かを授業全体を通して考えているか。 2 偏見や思い込みの危険性について思考できているか。			
備考				

ウ 実践事例3 「古典探究」×「地学基礎」

国語科（古典探究）× 理科（地学基礎） 学 習 指 導 案

授業者	
-----	--

学科	学年・組	日時	教室	使用教科書
----	------	----	----	-------

単元	地震と火山		内容のまとめ	地球の構成と運動
単元の目標	(1) 口語訳を通して、温泉の神秘性について考察を行う。 (2) 火山活動と温泉についての関連性について、プレートの運動と関連付けながら理解させ、愛媛県の温泉が湧く仕組みや成分などについて科学的に考察を行う。		指導計画 1 地球の構造 5時間 2 プレートの運動 5時間 3 地震と火山 4時間 (本時はその2時間目)	
単元の評価規準	知識・技能	① 火山や断層についての基礎的な知識を習得できている。 ② 口語訳を適切に行えている。		
	思考・判断・表現	① これまで学んだ知識を組み合わせ、考察を行うことができている。 ② グループ内で自分の意見を積極的に表現することができている。		
	主体的に学習に取り組む態度	① 学習に自主的に取り組もうとしている。 ② グループの話し合いに積極的に参加し、意見を出している。		

本時の指導

主題（教材）	火山活動				
前時の課題	地震の活動				
本時の目標	伊予の温泉の起こりについて、古典および科学の視点から考え、理解する。				
評価規準	伊予の温泉の起こりについて、複数教科の視点から考え、表現できている。（思考・判断・表現）				
指導過程	学習活動	時間	指導上の留意事項	評価の方法・資料等	
	導入	本時の目標を確認する。	10	・複数教科の視点から愛媛県の温泉について考えることを伝える。 ・本時の目標を確認し意欲的に取り組ませる。	
	展開	1 「伊予の温泉の起こり」の訳を行う。 2 愛媛県の温泉が湧く理由について科学的に考える。 (1) 考察を行う。 (2) 考えたことをグループで話し合う。 (3) 話し合いの内容を発表する。	50 7 10 13	・生徒同士でアドバイスし合う。 ・打ち返したい方向に体重移動するように意識させる。 ・これまでの知識を用いて温泉が湧く理由について考えさせる。 ・話し合った内容を記入させ、他グループと共有させる。	【評価方法（思・判・表）】 ・配布プリントの考察内容 ・話し合いへの参加度、内容
	整理	本時の目標を振り返り、まとめを行う。	10	・本時の振り返りをワークシートに記入させ、次時の課題を確認させる。	【評価方法（思・判・表）】 ・授業シートの内容
備考					

エ 実践事例4 「フードデザイン」 × 「保健」

家庭科（フードデザイン） × 保健体育（保健） 学習指導案

授業者

学科	学年・組	日時	教室	使用教科書	
単元	伊方町の高齢者の健康を守ろう		内容のまとめ	食生活と健康	
単元の目標	(1) 高齢期の健康に関する課題や特徴について理解し、高齢期の健康の現状と課題を把握し、関連する情報を収集・整理する能力を身に付ける。 (2) 高齢期の健康に関する情報から課題を発見し、その解決の方法を考察し判断するとともに、それらを表現する力を身に付ける。 (3) 高齢期の健康保持増進やそれを支える環境づくりを目指し、明るく豊かで活力ある生活を営む態度を養う。		指導計画	1 中高年期の健康 …… 2時間 2 伊方町の現状調べ …… 2時間 3 成果物作成及び成果発表 …… 3時間 (本時はその1・2時間目)	
単元の評価規準	知識・技能	高齢期の健康に関する課題や特徴について理解し、高齢期の健康の現状と課題を把握し、関連する情報を収集・整理する能力を身に付けている。			
	思考・判断・表現	高齢期の健康に関する情報から課題を発見し、その解決の方法を考察し判断するとともに、それらを表現する力を身に付けている。			
	主体的に学習に取り組む態度	高齢期の健康保持増進やそれを支える環境づくりを目指し、明るく豊かで活力ある生活を営む態度を養っている。			
本時の指導					
主題(教材)	伊方町の高齢者のために健康維持方法を紹介する準備をしよう				
前時の課題	校内や町にあるポスターや掲示物を見て、特徴を見付けておく。				
本時の目標	成果物づくりを通して、伊方町に住む高齢者の健康保持増進のために主体的に課題解決に取り組む。				
評価規準	伊方町に住む高齢者の健康保持増進のために、主体的に取り組んでいる。				
指導過程	学習活動		時間	指導上の留意事項	評価方法、資料等
	導入	前時の学習を振り返り、本時の目標を確認する。	10	・成果物がスムーズに作成できるように、ポイントを確認させる。	・タブレット
	展開	1 ナッジ理論を紹介する。	10	・ナッジ活用の成功事例の動画を視聴させる。	・タブレット ・資料 ・ワークシート
		2 成果物を作成する。	45	・参考例を黒板に掲示しアイデア出しの参考にさせる。	【評価方法】 ・ワークシート ・授業観察
		3 中間発表をする。 (途中10分休憩)	15	・他の班の良さを発見し自分の班に生かせるように意欲を持たせる。	
4 アイデアを改善する。	10				
整理	本時の学びを振り返る。	10	・本時を振り返り、次回の発表会に向けての意欲を持たせる。	・ワークシート	
備考					

オ 実践事例5 「生物探究」×「芸術（音楽Ⅲ・美術Ⅲ）」×「電子商取引」

理科（生物探究）× 芸術科（音楽Ⅲ）・（美術Ⅲ） × 商業科（電子商取引） 学 習 指 導 案					
理 科チーム目標：『三崎の海の現状から問いを見出し、科学的に探究する能力の育成』 芸術科チーム目標：『自分の考えや思いを相手に伝える豊かな表現力の育成』 商業科チーム目標：『CMに関する基本的な知識・理解をもとに、目的に応じた適切な媒体や表現方法を選択し、分かりやすい情報発信技術を身につける。』					
日 時		指 導 者			
学 級		教 室			
単 元	三崎の海を守ろう～私たちのメッセージ～	教 科 書	Joy of Music(教育芸術者) 美術3(光村) 電子商取引新訂版(実教出版) 探究(愛媛理科部会)		
指 導 目 標	三崎の海の調査研究を基に問題解決に向けた学習プロセスを通して、思考力や判断力、表現力を育む。 SDGsの観点から、主体的に地域の自然や人と触れ合うことで地域社会の一員としての自覚を養い、課題解決の意識を高める。	指 導 計 画	1 三崎の海の現状を調べる ……5時間 2 三崎の海の現状や課題をまとめる ……1時間 3 課題解決のための探求活動 ……6時間 4 発表準備及び成果発表会 ……3時間 (本時はその2・3時間目)		
本時の主題 成果発表会でみんなの意見を共有しよう					
目 標	① 自分の考えや思いを相手に伝えるために、用具や表現方法を工夫して発表する。 ② 共通の課題について、多角的な視点で捉え新しい視点や解決方法を見出す。				
指 導 展 開 過 程	学習活動(学習形態)	時間	指導上の留意点	資料・教具等	
	導入	これまでの学習内容を振り返る。	10	・イボニシの調査結果やこれまでの各班の活動を振り返る。	・プロジェクタ
	展 開	1 本時の目標と学習の手順を確認する。	5	・目標や手順を明示し、計画的に授業に取り組みせる。	・タブレット端末 ・ワークシート ・タブレット端末
		2 成果発表会に向けて準備をする。	35	・発表内容が相手に十分に伝わるよう、言語表現、使用媒体・情報のデザインなどを工夫させる。	・タブレット端末
	展 開	課題解決に向けて様々な情報を活用し、班員で協力して具体的なアイデアをまとめることができるか。			
		3 成果発表会を行う。	35	・生徒の疑問や意見に寄り添い共感した上で、より質の高い学びにつながるよう、各教科の指導者が専門的な知識や経験を活かして助言する。	・学習プリント
展 開	自分たちの成果を相手にわかりやすく発表したり、他の人の発表についても興味を持って聴いたりできるか。				
	4 意見交換を行う。	10	・他の班の発表から新たに気づかせたり発想を広げさせたりすることで、多様な視点や立場があることを理解させる。	・学習プリント	
整 理	本時の学びを振り返る。	5	・授業の感想を発表させる。	・ワークシート	
評価の規準等	【規準】 課題解決に向けて主体的に考え、クラスメイトと意見共有や協力をして相手に伝える成果発表ができたか。 <思考・判断・表現> 【方法】 ワークシートによる個人の振り返りによる				
備 考					

カ 実践事例6 「古典B」×「コミュニケーション英語Ⅲ」

国語科・外国語科（ 古典B×コミュニケーション英語Ⅲ ）学習指導案

日 時				指導者	
学 級		教 室			
単 元	和歌		教科書	MAINSTREAM English CommunicationⅢ (増進堂) 高等学校改訂版 標準古典B (第一学習社)	
指 導 目 標	1 日本の伝統的な文化である百人一首を様々な視点で読解することにより、和歌の奥深さや面白さを理解させる。 2 ICT 機器を適切に使用させる。 3 グループでの言語活動に積極的に取り組ませる。		指 導 計 画	1 万葉集……………2時間 2 古今和歌集……………2時間 3 新古今和歌集……………3時間 (本時はその2、3時間目)	
主 題	百人一首を STEAM 詠み！				
前時の課題	該当の和歌を短歌的、英語的、アートの、サイエンス的な観点で詠んでくる。				
本時の目標	1 百人一首を様々な視点で読解することにより、和歌の奥深さや面白さを理解させる。 2 既知の語句や表現を用いて自分の意見を英語で表現させる。 3 グループでの言語活動に積極的に取り組ませる。				
本 時 の 展 開 指 導 過 程	学 習 活 動	時間 (分)	指 導 上 の 留 意 点	評価の観点・評価活動・資料等	
	導 入	1 導入/Greeting 2 Warm-up Activity	10 10	・本時の目標を確認する。 ・日本の和歌と英語の poem との違いを意識させる。	
	展 開	1 百人一首 STEAM 詠み (1) 短歌チーム (2) 英語チーム (3) アートチーム (4) サイエンスチーム 2 百人一首 STEAM 探究 (1) 優秀作品の選出 (2) 想いの共有	40 30	・それぞれのチームの視点の違いを意識させる。 ・各教科の既習内容を使って説明するよう促す。 ・チームで積極的に言語活動を行うよう促す。 ・和歌に込められた作者の心情や情景を改めて考えさせる。	・タブレットPC 【評価規準】 ○和歌の内容を理解した上で、適切に口語訳ができています。 (思考・判断・表現) 【評価方法】 ○ワークシート 【評価規準】 ○既知の語句や表現を用いて自分の意見を英語で話している。 (外国語表現の能力) 【評価方法】 ○活動の観察 ○ワークシート
	整 理	まとめ/Closing	10	・次時の活動内容を知らせる。	
備 考					

(3) 県外視察研修（宮崎県）

ア 目的

「グローバル」な視点で活動する高校生、大学生、高校教諭、行政職員、民間企業、NPOなど様々なカテゴリーの方が一堂に会し越境的な学び合いの場をつくる機会とする。そして、参加者全体で未来へつなぐ次代に向けた新たなチャレンジを創出することを目的とする。

イ 期間

令和6年1月19日～1月21日 2泊3日

ウ 研修先

1月20日	・宮崎県立飯野高等学校 ・道の駅「えびの」 ・コカ・コーラボトラーズジャパン(株)えびの工場 ・京町温泉駅観光センター
1月21日	・宮崎県立飯野高等学校



エ サミットの内容

(ア) 高校生プロジェクト事例発表



高校生プロジェクト事例発表では、他校の高校生が取り組んでいる活動から多くのことを学んだ。地域をフィールドとした探究の進め方や地域との関わり方について、新たな発見をすることができた。また、プレゼンテーションの方法については、効果的に相手に伝える手法を学ぶことができた。他校の高校生がよりよい地域や環境づくりのために活動していることを知り、多くの刺激を受けた。

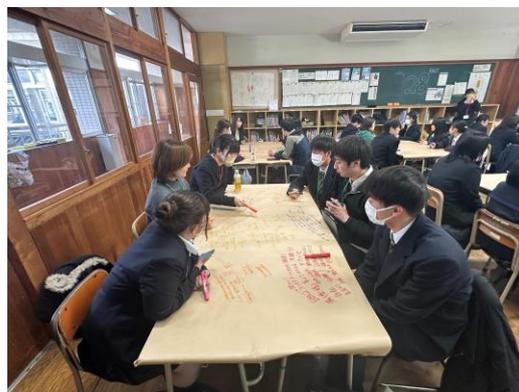
(イ) 班別フィールドワーク



フィールドワークの事前学習として、物事を見る視点について考えた。一つのものでも見方を変えれば新たな価値が生まれる。その視点を持ち、フィールドワークに向かった。フィールドワークでは、えびの市内の視察を行った。道の駅えびのでは、豊かな自然を生かした農産物が販売されていた。コカ・コーラボトラーズジャパン(株)えびの工場の見学では、コカ・コーラ社製品ができる様子や、コカ・コーラの歴史を学ぶことができた。特に、コカ・コーラ社の環境に対する取組は興味深いものであった。京町フィールドワークでは、温泉街ということもあり、多くの温泉施設を見付けることができた。町の中心には温泉マップやバス停をモチーフにした温泉看板があり、その町を象徴するものを様々な形でアピールすることの大切さを学んだ。また、伊方町も課題としている空き家も多くあり、どの町においても同じような課題を抱えていることに気付くこともできた。最終ゴール地点である京町温

泉駅観光センターでは、えびの市観光協会の方から地元の特産物を使った食事が振舞われ、食事や地域の方の優しさからえびの市のよさを感じることができた。

(ウ) 未来カフェ（ワールドカフェ）



「ワールドカフェ」とは、カフェのようなリラックスした雰囲気の中で、少人数に分かれてテーブルで自由に対話を行い、他のテーブルとメンバーをシャッフルして対話を続けることにより、参加した全員の意見や知識を深めることができる対話手法のことである。今回のサミットでは、次代に向けた新たなチャレンジとして未来に続くようにと、「未来カフェ」と題して実施された。「人の中のスイッチとは?」「成功とは?」という二つのテーマについて、人の意見に耳を傾け、どの意見に対しても共感することを意識しながら、話し合うことができた。普段考えていなかったことや自分の考えを言語化し、他の方々と共有することで、新たな価値観を生み出すことができた。

オ 生徒の感想

石崎 羽琉（愛媛県立三崎高等学校2年 伊方町出身）



私は今回の活動を通して、たくさんの経験と学びを得ることができました。私は人見知りなので会場に着くまでとても不安でした。活動が始まってからもなかなか同じ班の人に話しかけることができず困っていましたが、なんとか勇気を出して話しかけることができ親睦を深めることができたのでよかったです。高校の授業ではこのような経験をすることはあまりなく、大変でしたが、自分にとってとてもよい経験になったと思います。

1日目の他校の活動紹介のプレゼンを聞く場面では、活動内容の濃さとプレゼン力の高さに圧倒されました。どの学校も内容がとても分かりやすく、質疑応答の場面でも考え込まず、すらすらと質問に答えていて、自分には絶対に真似できないと思いました。活動内容も学校によって多種多様で、参考になるものが多く本当に勉強になりました。今回学んだことを生かして自分も何か行動を起こしたいと思います。

2日目のディスカッションでは、いろいろな人と考えを共有することができました。どの人も自分の考えをしっかりと持っていて、それを言語化するのがとても上手だと思いました。1日目のプレゼンと同様に、本当に全員のレベルが高いと感じました。また、話を聞くだけでなく、発表もしっかりできました。2日目で周りの雰囲気少し慣れてきていたこともあって、1日目よりも緊張せず自分の意見を伝えることができたのでよかったです。周りの人たちが自分の意見を否定せずに聞いてくれてうれしかったし、とてもほっとしました。これからの人生で自分の意見を発表する場面はたくさんあると思うので、そのときは今回のことを思い出して、自分の考えに自信を持って話せるようにしたいと思います。

私は2日間を通して、自分から行動を起こすことの大切さを学びました。知らない人と話をする上でも、何か活動を始めるときでも、受け身ではなく、とにかく自分から動くということが本当に大切だと思いました。このことをこれからの学校生活や日常生活で活かしていきたいと思います。緊張と不安ばかりの2日間でしたが、自分なりにいろいろなことを考えながら活動に参加することができたので、成長することができたと思います。また機会があればこのような活動に積極的に参加したいです。

清水 光 (愛媛県立三崎高等学校 2年 伊方町出身)



私は、G L S (全国グローバルリーダーズ summit)を通して、大きな刺激を受けました。2日間にわたって行われたG L Sですが、全体を通して感じたことが一つあります。それは、参加した全員のコミュニケーション能力や語彙力がものすごく高いということです。これは今回のG L Sの様々な場面で実感しました。

1日目の午前、全国各地から参加している高校生のプロジェクトの発表を聞かせていただき、午後は、会場であった宮崎県えびの市でフィールドワークを行いました。午前中、私たちは宮崎県立飯野高校、茨城県立那珂湊高校などの発表を聞かせていただきましたが、プロジェクトやプレゼンテーションのレベルが高く、驚きました。中でも宮崎県立飯野高校の「Nection」というグループは、社会課題解決に向けて、メンバー自らが考えてプロジェクトを立ち上げるだけでなく、台湾研修へ行ったりクラウドファンディングを行ったりと、「本当に高校生なの？」と疑うほどすごかったです。午後からのフィールドワークではいくつかの班に分かれて、道の駅やコカ・コーラ社の工場見学へ行ったり、えびの市という町を歩き回ったりしました。北海道出身や広島県出身の同年代の人、大学生など、様々なカテゴリーの人がいましたが、みんなと仲良くなれて、夜にはご飯を一緒に食べたり温泉へ行ったりする友達もできました。

最終日の2日目には、「未来カフェ」と呼ばれる、一つのテーマについて、様々な人が一同に集まって対話する場に参加しました。今回のテーマは、「人の心の中にあるスイッチとは」と「成功とは何か」の二つのテーマについて話し合いました。数時間の対話でしたが、

いろいろな人の考え方や価値観に触れ、同時に新しい気づきを得ることができるよい機会になりました。

2日間にわたって参加させていただいたGLSでいろいろな人と関わることで、自分の課題は、専門的なスキルではなく、積極性、コミュニケーション能力、語彙力などの社会的なスキルであり、それらはとても大切なものであると改めて気づきました。今回の様々な学びを生かし、残りの高校生活や社会に出てから、いろいろなことに目を向けチャレンジしていきたいです。

カ 引率教員による所感

日浅 理香（地域協働課）

今回初めて参加させていただき、生徒はもちろん私自身の教員生活の中でも大きな変容をもたらす経験となった。本校では、「総合的な探究の時間」において三つの班に分かれ、地域や社会の課題を設定し、各班で探究しながら活動している。他校の高校生が取り組む活動発表を聞き、自分たちの活動に不足しているところや今まで発見できていなかった視点に気付くことができた。また、プレゼンテーション力の不足を痛感させられた発表であり、参加した生徒たちからはもっと様々な経験をしたいという声が挙がっている。特に、印象に残ったプログラムは「未来カフェ」である。未来カフェでは「人の中のスイッチとは?」「成功とは?」について、高校生や大学生、高校教諭、民間企業が混ざり合って対話を行った。今まで考えたことがなかった自分の思いを言語化し、共有を深めていく中で、高校生の柔軟な考え方や視点を知ることができ、とてもよい経験となった。VUCA時代には、予想外のできごとが次々と起こり、これまでの常識が通用しなくなると言われている。これからこの時代を生きていく私たちにとって、様々なアイデアを知り、視野を広く持ち、柔軟に対応できる力を身に付けることは必要不可欠である。また、様々な人とコミュニケーションをとりながら対応することも大切である。この未来カフェによって、コミュニケーションの活性化や相互理解、新たなアイデアの創出などにつながることを学ぶことができ、今後もぜひこの対話手法を活用したいと感じた。

この2日間を通して、生徒たちは様々な立場の人と交流をすることの大切さを学んだ。サミットが終わり、生徒たちからも、他の学校や大人、地域の方との交流をもっと深めたいという声が挙がっている。これからも機会があれば様々なイベントやサミットに参加してもらいたい。

